
夢の盾 現の剣

橙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の盾 現の剣

【ZPDF】

N7617M

【作者名】

橙

【あらすじ】

杉原さんは、僕の目の前で「あひら」から帰ってきた 悪夢と共に。

帰還から始まる異世界譚。

普通の文化系男子が、好きな子のためにがんばるファンタジーです。

この話を聞いて杉原さんのことの大嘘つきだという人がいるかもしれない。でも、これは本当の話だ。少なくとも僕は、これが嘘じやないと知っている。自分の目で見てきたし、誰より大いに関わってきたと思う。そうこれは、僕の戦いでもあった。

でももしかしたら、どれだけ何を言つたって、みんな信じないかもしれないな。「あの時」を見たのは、僕だけだったから。

「あの時」というのは、一つの終わりだった。そして、僕にとつての始まりでもあった。

それは、静かに始まった。

といつてもちょうど昼休みだったし、教室ではみんなが弁当を広げていて、だから全然静かじゃなかつた。でもそれが始まつて、僕の耳には一切の音が聞こえなくなつた。静かに、静かに閉ざされた。

「あの時」、僕の前に座つた杉原さんがふと笑うのをやめた。サンドイッチを持つ手も止まって、杉原さんのすべてがその一瞬、世界から切り離されたように停止した。ただ淡い色の目だけが、ゆらゆら揺れていた。

その時の僕にはもちろん、一体何が起きているのかまったくわからなかつた。ただ息をのんで、杉原さんの水面みたいな目を見つめていた。

静かだつたけど、劇的だつた。限りなく薄めた絵の具に、筆先から少しずつ濃い色を落とすと、にじんで広がるだろう。そんな感じ。ゆらゆら揺れる目に、急速に何かが吸いこまれて、濃くなつっていく。瞬きのたび、杉原さんの目はしつかりした重さを取り戻していくようだつた。

杉原さんの目は明るい茶色をしていて、瞳の周りが灰色がかつて

いるんだ。そんなことを、その時発見した。まつげもぱっちり長かつた。それは前から知っていたけど。

全部吸いこんで、杉原さんは目を閉じた。僕の耳に、やつと周りの音が戻ってきた。笑い声、校内放送、誰かが廊下を走つていく音。何も変わらなくて、ただ杉原さんだけが決定的に違つていた。そしてそれを知つているのは、僕だけだった。

杉原さんは何度も瞬きをして、僕の方を見た。もう揺らいでいるなくて、ずつしりとした口をのみこんだように確かに、静かな目だつた。

「……おかれり

僕はそう言つた。そう言つのが、一番正しいような気がした。そして、やつぱり正解だった。杉原さんはふつと笑つたんだ。

「うん、ただいま

そしてぽつりと一粒涙を流した。

それは始まりだったけど、終わりでもあった。

杉原さんは帰つてきた。

僕たちはそれから保健室へ行った。

杉原さんの涙を中西に見つかって、ちょっとつむぐべなりそうだったから。

嶋本が、葉月を泣かした。

あの場面を見れば確かに、誰だつてそう思つてしまつだらう。男女が向かい合つて飯を食つていて、女の子が泣き出したら、9割がた男が悪い。それは間違いぢやない。中西はちょっとつむぐけど、正義感がある奴だから、杉原さんを心配したんだと思つ。

もちろん本当は全然違つから、中西の責める視線に僕は慌てた。杉原さんがとつさに「違うの、ちょっと体調が悪くて」と言つたので、僕たちは教室を抜け出すことができた。中西はかなり、不審そな目をしていたけど。

保健室の椅子に座つた杉原さんは、もう落ち着いていた。給水機から水をついて渡すと、小さくありがとつと言つてくれた。

「大丈夫?」

僕が聞くと、杉原さんは微笑んで頷いた。

「嶋本……新くん?」

「うん」

確認するように呼ばれたので、ちょっと不安になった。

「僕のこと、わかる?」

「うん」

杉原さんはすぐに頷いて、そのこと自分でも驚いたように瞬いた。

「うん……私、わかる」

よかつた。僕は心底ほつとした。

普通なら、今の今まで目の前にいた人のことがわからなくなるな

んて、ありえない。冗談だと思うかもしないけど、僕は結構本気

で不安だった。ついさっきの杉原さんを見てしまったから。

何が起こったのかよくわからないけれど、何かが起こったことは

確かなんだ。

「あのや……私たち、つき合つてるんだよね」

杉原さんは両手でコップを持って、上目遣いに僕を見た。
すこしく可愛かっただし、ほつとしていたこともあって、僕はおどけて答えた。

「うん。まさか忘れてないよね? 夏休みのちょっと前からつき合つてるよ」

「……覚えてるよ」

杉原さんは目を伏せた。様子がおかしいな、とは思った。でもしつかり確認しておきたいところだったので、僕は笑つて続けた。

「よかつたー。あの告白の時に振り絞つた勇気が、なかつたことになるかと思った。7月の頭くらいだったよね、覚えてる? 部活前に僕が呼び出して、それで

「嶋本くん」

杉原さんが鋭く遮つた。

その呼びかけからして、もうおかしかつた。だって、彼女は僕のことを「新くん」と呼んでくれていたから。それは僕の努力の賜物だ。告白してつき合つ前、ちよつといいなつて思つていた時から、名前で呼んでつてお願いしてきた。仲良くなつて緊張がほぐれて、やつと呼んでくれるようになつたんだ。

杉原さんのことを名前で呼びたつてお願いは却下されたけど、僕の名前は呼んでくれていた。

杉原さんは顔を上げた。きつぱりと強い目をしていて、僕は悪い予感しかしなかつた。

「ごめんなさい。こんなこと、いきなりかもしないけど……

僕は杉原さんの桜色の、可愛い唇を見つめていた。そこから出る

次の言葉を予想して、なぜだかぼんやりとしていた。

「別れよう、私たち」

予想通り。それでも、僕は冷たい水をぶっかけられたみたいに、身体の芯が冷えてずんと沈んだ。茫然としてしまうくらいショックだった。

いきなり、確かにいきなりだ。僕たちはまさに今まで、問題なくつき合っていたはずだ。昼飯と一緒に食べて、部活終わったら一緒に帰つて。夏休みには夏期講習の合間にぬつて、映画に行つたり花火に行つたりしたぞ。別れる要因なんて、僕には見当たらない。

「……理由、聞いてもいいかな」

別れるなんて絶対嫌だ。そう喚く心を押し殺して、僕は尋ねた。杉原さんの顔が、悲しげに歪んだ。泣き出しそうに見えて、僕ははっと胸をつかれた。

けど、杉原さんは泣かなかつた。膝上にあいた手をぎゅっと握つて、一度大きく深呼吸をする。そして、僕をしっかりと見た。「嶋本くんには、全部話す。そうしなきゃ駄目だと思つ。でも、信じるか信じないかは、嶋本くんが決めていいよ」

「うん」

僕はちらりと田を上げて時計を見た。夏休みはあと1~5分くらい。もし長くかかるなら、5限をサボつてもいいや。覚悟を決めて、僕はパイプ椅子に座つて杉原さんに向き合つた。

「ありがとう、嶋本くん。私ね」

杉原さんが話し始める。僕はちょっと手をあげて、それを遮つた。話を聞く前に、一つだけ言わなきやいけないことがあった。

「あのさ、名前、新でいいよ。新つて呼んでよ」

「うん」

杉原さんは笑つた。もつ少しで泣き顔に変わりそつた微笑みだつた。

日が落ちるのが早くなつた、と思つ。季節は確実に秋へ向かつていて、昼の日差しあきついけど、それがなくなつてしまえば風はひんやりと腕を撫でた。寂しい虫の鳴き声に覆われた夕暮れ、夜はもうすぐそこだつた。

合唱部では迫りくる学校祭でのコンサートに向けて、日下銳意練習中だ。当然、今日も追い込みの練習だつた。僕の歌う曲目は、去年流行つたポップス2曲と、クラシックの重唱を2曲。半分カフェみたいなコンサートで、前売りチケットご購入のお客さんには1ドリンクサービスあります。

そうだ、杉原さんに渡そうと思つて、チケットを1枚買っておいたんだ。

ぽんやりそんなことを考えていたら、後ろからいきなり衝撃がきた。

「聞いたぞ新。お前、あの彼女泣かしたんだってなあ」

振り返ると、にやついた和志がいた。とっさに反応できずにいたら、薄っぺらい鞄でまた背中を叩かれた。

青いフレームの眼鏡の奥、ぎょろっとしたつり目がおもしろそうに細められている。それを見た途端、僕は何もかも面倒臭くなつて、やり返すことをやめた。和志の見せる、あけすけな好奇心にうんざりした。

「……泣かしてねーよ」

僕は投げやりに答えた。和志はそのまま、僕の隣に並んだ。

「彼女、早退したんだろ? 何があつたんだろうが」

杉原さんは、結局5限には出ずに帰つていった。

心配だつたけど、僕は5限の生物も半分出て、さつさまでちやん

と部活にも行つた。混乱しているという理由では、高校生は休めない。歌に全然身が入つてないつて、部長の赤川さんには怒られたけど。

杉原さんの話してくれたことが頭の中でぐちゃぐちゃに散らばつて、僕は途方にくれていた。正直、これ以上何も考えたくない。

「なあ、ケンカでもしたのか？お前らもうダメになつたの？」

和志は直球で聞いてきた。僕はもうそれで限界だった。

「黙れ。しゃべんな。蹴るぞ」

睨みつけると、和志は驚いたように手を壁つて足を止めた。僕はもちろん、一緒に立ち止まつたりしなかつた。むしろ足を早めて、和志を置き去りにしてやつた。

「えーっ、マジで別れたの！？」

和志の無神経な大声が追いかけてきた。うるさい、最悪だ。僕は心中で大いに悪態をついてやつたけど、やつぱり足は止めなかつたし、振り返りもしなかつた。

「こじじゃない別の世界。突風に吹き飛ばされて、杉原さんはそこへ行つた。

「そうとしか考えられない。すごい風で、思わず頭を庇つてしまつた。その世界では、杉原さんは特別な扱いを受けたのだという。身体をもたない者として。その世界では杉原さんの身体はちょっと透けていて、思い通りに自由に姿を変えることができた。鳥に獸に、自分ではない人に。そして、その世界で唯一「悪夢」に対抗することができた。

「悪夢」について、杉原さんはたくさん説明してくれた。でも、僕にはそれがなんなのか、全然わからなかつた。ただ「悪夢」とは僕の知るような悪夢ではなくて、杉原さんの敵で、その世界では幽霊のような、伝染病のようなものだつたらしい。

「『悪夢』は人の心を支配して、身体操るの。心だけだつた私は、むしろ『悪夢』の影響を受けなかつた。身体の入れ物がなければ、『悪夢』は入り込めないから」

そして、「悪夢」に取り憑かれた人々を、正氣づかせることができた。

「やり方はね、『悪夢』と同じなんだ。人に　身体の入れ物に入り込んで、心に直接働きかける。私の場合は、目覚めさせる」身体をもたない杉原さんだからできる、特別な役割。自覚してそれをするようになつてから、少しずつ力をつけた。そのうち「悪夢」の側からも警戒されるようになつて、攻撃を受けるようになつた。

「悪夢」の攻撃は、その名の通り精神攻撃なのだそうだ。でも、それから守つて、支えてくれる人達もいた。

「……でもね、ちょっと無理しすぎて、ダメになつちゃつた。疲れて動けなくなつた時、帰れって言ってくれた人がいて。だから、こつちに戻ってきたの」

僕は 何も言えなかつた。

杉原さんの語る世界は到底信じられるものではない。そしてあつさり嘘だと笑つたは、あまりに大真面目だった。杉原さんは僕の反応をいちいちうかがうこともなく、白い床を見つめてただ淡々と話した。そのせいで、僕は何をどう返せばいいのか、ますますわからなくなつた。

心だけ、異世界へ飛び出した杉原さん。じゃあ、ここにいた杉原さんは、何だつたつて言つんだ？

足下がガラガラ崩れしていくような気がした。

杉原さんの心は、今までずっとここにいなかつた？

「……いつから？」

いつから、そこにいたの？

僕はやつとそれだけ口に出した。口の中がひどく乾いていて、それなのに手はじつとり湿つっていた。

杉原さんは少し首を傾げたけど、僕の問いかけがわかつたようだつた。一度唇をかんで、ゆっくり答えた。

「……4月。2年生になつた、始業式の口から」

それで終わりだった。もうおしまいだと、突きつけられたような気がした。

足下が崩れて、まっさかさまに落ちていく。その浮遊感にも似た真つ暗な思いを、僕は初めて味わつた。

あれが、失恋といつものなんだろうか。

混乱しきつて鬱鬱とした気分のまま、僕はやっと家に帰ってきた。いつもより重く感じる扉を開けると、テレビのバカ笑いが玄関にまで響いてきた。こちらの気分などお構いなしのその大音量が、ひどく癪に障った。沙也の奴が、また消し忘れたんだ。

リビングのテーブルの上には、開いて伏せたマンガと、お茶の入ったコップが出しつぱなしになっていた。だらしない妹だ。沙也はちょっと頭がいいけど、こいつところは本当にダメだ。

イライラしながら、テレビを消してコップを流しにおく。鉛みたいな重さのため息が出た。どうして僕がやらなきやいけないんだ。今、とても物に八つ当たりしたい。このマンガを壁に叩きつけてやりたい。

そんなことを半分本気で思いながら、沙也のマンガを手にとった。ピンク色の表紙には、バンダナを巻いた目の大好きな女の子が、妖精みたいな生き物を肩に乗せて笑っていた。見たことのないようなその服装に、僕はまさかと思つて表紙をめくつた。

あらすじをなぞると思つた通り、それは異世界へ冒険の旅に出た女の子の物語だった。

7つの海を旅して、伝説の秘宝を探す。不思議な石の力で妖精を仲間にする。わけあって海賊になつた王子様と、恋に落ちる。

甘く危険な旅の物語に、僕は興味なんかない。でも、その続きが知りたいと思つた。

異世界へ行つた女の子は、帰つてきてどうなつた？

「なにしてるの？そんな、制服着たまんまで」
すぐそばで沙也の声がして、僕はぎょっとした。ジャージ姿の沙也が、テーブルに手をついて、僕の顔を覗き込んでいた。首を傾げ

て、訝しげに眉をひそめている。

「あ、いや……別に」

近づかれたことに、全然気付かなかつた。どぎまぎして、僕は即座にマンガを沙也に返した。いつの間にか、食に入るよつてマンガにのめり込んでいたらしい。

「そんな真剣になるくらい面白かつた? 何なら貸そつか。あつくんつて、そういうの好きだつたつけ

「いや、いいよ」

手を振つて断ると、沙也は片眉を上げてふつと呟いた。そのまま興味が失せたように、ぐるりと背中を向けて部屋へ戻つていく。

ふと、言葉が口をついて出た。

「 なあ、女の子って、どのくらいの確率で異世界へ行くもんなの?」

「はあ?」

語尾をはね上げて、沙也が振り向いた。

沙也は驚きすぎて笑うのを失敗したような、微妙な顔をしていた。何も言われなかつたけど、沙也の言いたいことがわかる気がした。僕だって、寝言だと思うだろ。

「いや……なんでもない」

沙也の顔を見ないようにしながら、早足で自分の部屋に向かつた。もの聞いたげな沙也の視線が追つてくるのがわかつた。

自分の部屋がこの世で一番安全な場所のように思えた。だって僕以外誰もいない。スイッチを切るように、そのままベッドの上へ倒れ込んだ。

頭がガンガン痛む。閉じた瞼の裏で、いろんなイメージがらせんを描いて浮かんでは消えた。保健室の杉原さん、落ちていく僕。搖らぐ水面のような杉原さんの目。

告白した日の真っ赤な顔。初めて一緒に帰ったときの揺れる手。あと、花火大会の夜の。

「……心がいなかつたなんて、嘘だろ」

目を開けて、泡みたいな幻を追い払つた。

全部嘘、なのかもしれない。それが一番説明のつく答へだ、残念ながら。

つまり別の世界の話は真っ赤な嘘で、杉原さんは僕と別れたいがためにすべてをでつち上げた。その場合、あの涙も真剣な表情も、芝居だつたことになる。

一番おかしいところのない、救いようのない痛い答へだ。でもまだ、こっちの方がましだつた。

「嘘だよな……」

眩きは思つた以上に情けなく、頼み込むような響きになつた。

一番痛いのは、話が本当だつた場合の方だ。

未だに全く信じられないけど、異世界の話がもし本当だつたら。僕は僕の心を、否定されたも同然だつた。そうだろう？僕は心が不在の杉原さんを好きになつて、告白して、一緒にいて喜んだりして。馬鹿みたいだ、いや本当の馬鹿だ。

もし杉原さんの話が本当なら、僕の心が嘘だつたつてことになる。好きだと思ったこともドキドキしたことも笑顔が嬉しかつたことも、全部嘘。だつてその対象の杉原さんは、本物の杉原さんじゃなかつたんだから。そこに心はなかつたんだから。

だから認められなかつた。

どつちに転んでも最悪だつた。嘘なのか本当なのか、もう関係ない。一番逃げたい事実が覆らない。

僕はふられたんだ。

四 杉原さんの心

最悪な気分といつのは、一晩寝たくらいじゃ浮上しなかった。それでも飯は食うし、学校にも行く。授業を聞いて、友達と話す。習慣つて強いな、と思った。たぶんいつも通りにできたはずだ。いつもと違うのは、何をしても他人事にしか感じないことだつた。薄い膜ごしに、普段の生活というものを眺めているみたいだつた。杉原さんは完璧にいつも通りに見えた。眞面目に授業を受ける横顔も、友達と楽しそうに話している笑顔も。

僕に対してでさえ、彼女は変わらなかつた。朝一番に昇降口で、「おはよう」と声をかけてくれたのだ。不意をつかれて僕が何も返せないうちに、杉原さんは歩いていつてしまつたけど。

その後も、杉原さんは僕を変に避けたり、気まずく目をそらしたりしなかつた。目が合わせられなかつたのは僕の方だ。杉原さんのことが、全然わからなかつた。

そんないつも通りでも、僕と杉原さんが別れたといつウワサは流れたようだつた。一日でどうして話が広まるのか、ソースは誰のかは知らない。僕は友達の何人かから、「お前別れたつて本当か?」と聞かれただけだ。その度に、曖昧に返しておいた。

もしかしたら、昼を一緒に食べなかつたことが、ウワサに拍車をかけたのかもしれない。つき合つてから、大抵昼は一緒にいたから。逃げたのはもちろん僕の方だ。3限が終わつた後に早弁して、昼休みは自由参加の合唱部の昼練に、久しぶりに出た。昼練は和志の、同情を含んだ眼差しが本気で鬱陶しかつた。

いつも通りの振る舞いができたのは6限までだつた。部活では2日連続で、赤川さんに怒られた。

赤川さんはとても鋭い。歌つてゐる時にぼんやりしていたり、他

のことを考えていたりすると、すぐにバレる。彼女はふつべう丸い顔をしてるけど、睨む目が厳しくて迫力があるんだ。

「嶋本くん、集中してないようね」

赤川さんの地声は少し高い。歌う時はのびやかなアルトだけど、普段、特に僕みたいなのに怒る時は、硬質な冷たい声になる。僕は頑垂れて、精一杯小さくなつた。

「……ごめん」

「パーティーの自覚ないの？もし調子が悪いなら、帰つた方がいいんじゃない？」

確かに今日は帰つた方が、僕と赤川さん双方のためになると思った。パーティーとしてあるまじき考え方かもしれないけど、僕としてもつ無理だった。

「やつする」

僕はあつせりと合唱台から降りた。

あつけにとられたような赤川さんを横目に、荷物を持つて第一音楽室を出る。扉を閉めた途端、中で皆が騒然となるのがわかつた。

「赤川、お前な、あいつの気持ちも酌んでやれよ」

和志の非難するような声が聞こえた。あいつ、変な友情にかられて、余計なことしゃべらないといいけど。

日の当たらない、ひんやりした階段を下りていぐ。一段一段、沈み込んでいくようだつた。部活もいい加減にしてしまつくらい、僕は最低でぐぢやぐぢやだつた。

校門の前で会えたのは偶然で、奇跡みたいなものだつた。誓つて、見計らつたりなんかしていない。

下駄箱のところでは全然気づかなかつた。校門を出る直前、ふと顔を上げた時にわかつたんだ。すぐ前を歩いているのは杉原さんだつた。

ぽかんとする僕を、杉原さんが不意に振り返つた。一拍遅れて、

彼女も目を丸くする。そしてふつと笑った。

「早いね。部活終わつた？」

僕は曖昧に頷いた。なぜか久しぶりに杉原さんの顔を見た気がして、目が離せなかつた。

自然な流れで、僕たちは並んで歩き出した。今日一緒に帰るなんて思つてもみなかつたことなのに、お互いが隣にいることに全然違和感がなかつた。歩くスピードも無理なく合わせられる。あまりにも、いつもの帰り道だつた。

「なんかね、図書室ではつとしちやつた。私自習してるんじやなくて、待つてるんだ、つて思つて。バカだね」

杉原さんはくしゃつと、苦笑気味に笑つた。待つた相手は僕だと、ちゃんとわかつた。

そうだ。僕の部活が終わるまで、杉原さんはいつも大抵図書室にいた。杉原さんは帰宅部だから、僕に合わせてくれていたんだ。嫌な顔もせずに。

じんとしたけど、同時に、もう僕を待つてくれることはないんだとわかつてしまつた。

だつて今は、部活が終わる正規の時間よりずっと早い。もう待たなくていいんだと気づいて、杉原さんは図書室を出てきたんだろう。ショックが顔に出たんだろうか。杉原さんが心配そうな表情で僕を覗き込んだ。

「新くん、目の下にクマができる。体調悪い？なんか、疲れてるつていうか

言いかけて、杉原さんは目を伏せた。

「つていうか、私のせいだよね」

「いや、僕は別に体調崩したとかじゃないから、心配しないで。杉原さんこそ顔色悪いけど、平氣？」

僕は慌てて言つた。単なる寝不足だ。まあ、原因は杉原さんだけど。でも心配かけたくないし、変に自分を責めてほしくなかつた。そして、言つてから改めて気づいた。杉原さんの顔色が悪い。

「本当に、大丈夫？」

逆に心配になつて問いかけた。杉原さんはいつも通りだと思つていたから、見落としていたんだ。明らかに彼女の顔には血の気がなかつた。寝不足のクマどころの話じやない。

それでも、杉原さんは微笑んだ。

「ありがとう。でも大丈夫。ちょっと、疲れなかつただけだから「やんわりと拒まれた。そんな気がした。僕はもう無関係なのだと。

それから、これまでの帰り道と同じように、駅のホームで僕たちは別れた。向かう方向が反対なんだ。

音楽と共に閉まつた扉の向こう、手を振る杉原さんを見送つた。人混みに紛れる彼女も、彼女を乗せた電車もゆっくりと動き出して、すぐ見えなくなつた。

杉原さんはやつぱり、無理して笑つていた。僕にはどうしてもそう思えた。どうして眠れなかつたんだろう。どうして、がんばつて笑顔をつくつたんだろう。

僕は初めて、杉原さんの気持ちのことを考えた。

僕の気持ちだけで手一杯なのは、今も変わらない。けど、彼女の方は「別れよう」と言つた時、何を思つていたんだろう。そして今、どんな思いでいるのだろう。

青白い杉原さんの顔を見て、僕はやつと彼女の心に目が向いた。それを知らなきゃダメだと思った。

五 特別教室棟

杉原さんは既と距離を置いている。僕が出した結論はそれだつた。

杉原さんの心が知りたいと思って、昨日一日かけて彼女を観察したのだ。自分でも、気持ち悪い奴だなと思うよ。こつそり杉原さんを目で追つて、ふとした表情も見逃さないように気を配つて。でももう、誰に何を言わてもいいや。そんな気分だつた。僕は僕なりのけりのつけかたを探すつて、決めたんだ。

杉原さんは少し、独りでいることが多くなつていた。ほとんど違和感を覚えないくらい、僅かな変化だ。たぶん、おかしいと思うのは僕くらいだろう。昨日の「あの時」以前と今の杉原さんを比較できるのは、僕しかいないから。

例えば、杉原さん自身から友達に話しかけに行くことがなかつた。休み時間は誰とも話さず、1人で本を読んでいた。選択授業の教室移動も、ゆっくり準備をして友達とはタイミングをずらして、1人で行つたようだ。何気ないことだけど、妙に気になつた。

極めつけは、昼休みだ。僕が昼練へ行くより早く、杉原さんは教室を出て行つた。弁当も食べずに。

さすがにダメだと思って、後をつけることはしなかつた。でも気になるから、昼練に行くのはやめて、ずっと教室にいた。ちょっとした用事なら、すぐに戻つてくるだろうと思つて。

でも杉原さんは、5限が始まる直前まで戻つてこなかつた。どこへ行つていたんだろう。毎、ちゃんと食べたんだろうか。

杉原さんはちょっと疲れているように見えるけど、それ以外はいつも通りだ。話しかけられれば笑つて返す。授業で当たられたらは生きはき答える。

でも、何というか 透明になってしまったみたいだった。存在を薄めて、杉原さんは遠くへ行ってしまった。
誰も、気づいていないけど。

僕は決心した。こうなつたら、もう他に方法はない。杉原さんから、直接話を聞くんだ。

ちゃんと、本当のことを言つてほしいと言えよう。異世界なんかの話じゃなくて、本当は何を考えているのかを。杉原さんは、絶対に何か悩んでいる。

決意とともに学校へ来て、僕は朝からチャンスを探した。授業中もじりじりしながら過ごして、ついに昼休みになった。

昨日と同じように、杉原さんは教室を出て行く。僕は迷わず席を立つた。

「あ、嶋本くん」

彼女に続いて教室を出ようとした時に、呼び止められた。委員長の北沢だ。ちょうど同じタイミングで教室を出ようとして、鉢合わせしてしまった。

北沢は眼鏡を押し上げて、しつかり者じこはきはきした口調で言った。

「ちょうどよかった。嶋本くん命懸けだよね？あのさ、音楽の宗田先生に」

「じめん北沢、後でもいいかな」

田で杉原さんを追いかがり、僕はうわの空で言った。杉原さんは廊下をまっすぐ進んでいく。

北沢は僕の視線の先に気付いたようだった。

「……葉月と何かあった？」

首を傾げ、眉を寄せて北沢は言った。ため息を含んだ心配そうな

声だった。

「なんだかあの子、元気ないよね」

「うん」

僕は頷いた。

短く応じただけだけど、内心ではちょっと感動に震えていた。

僕だけじゃない。気付いている人は、ちゃんといるんだ。それはとても勇気づけられることだった。杉原さんが皆から遠ざかろうとしていること、僕以外にもわかっている人がいる。僕一人ではないといふことが、こんなにも心強く、嬉しいことだなんて。「心配だから、ちょっと一緒に話そうと思って」

杉原さんは廊下の突き当たりを左に曲がっていった。あの先は渡り廊下で、特別教室棟に繋がっている。

「ごめん、行くわ

「……うん」

気がかりそうな顔をした北沢に軽く手を振つて、僕は走つた。

すぐ追いつけるはずだった。杉原さんの歩調は決して速くなかつたし、特別教室棟までは何もない、ただの廊下だ。昼休みだから人は多いけど、見失う要素なんてなかつた。

でも、廊下を曲がつてもそこに杉原さんの姿はなかつた。

教室の方はがやがやと賑やかだったのに、渡り廊下の先の薄暗い別棟はしんとしている。授業中でもないこの時間、ここに用がある奴なんて普通はいない。授業後には金管バンドの練習場になつている棟だけど、昼の練習は禁止されているらしい。トランペッタビコロか、物音一つしなかつた。

南向きの窓がない特別教室棟はひんやりした空氣に沈んでいて、少しの音でもよく響いた。化学実験室や生物準備室、物置になつている教室、どの扉もぴつたり閉じられている。杉原さんはどこにいるんだろうか。

風漬しに一つずつ入つて確かめようか考えていた僕の耳に、かすかな音が聞こえた。

話し声のようにも聞こえて、僕はどきりとした。息を殺して、耳をそばだてる。

けれどそれきり、音は聞こえてこなかつた。

もうヤケクソだ。僕は一番近い教室の扉を、勢いよく開けた。鍵はかかっていなかつた。

「 杉原さん？」

耳が痛くなる静けさに負けないよう、僕はわざと大きな声を出した。

そこは、美術の準備室のようだつた。選択で美術を取つていない僕には、初めて入る教室だ。つんと、ほこりの淀んだにおいが鼻をつく。普通教室の半分くらいの広さで、絵を乾かす棚や石膏の入ったケースが並べてあつて、ずいぶん狭く見えた。

ゆっくり見回してみても、探している人の姿はなかつた。

「 いないか……」

咳きながら、僕は念のため中へ入つた。気配はなかつたけど、この教室には死角になりそうなところが多かつたから。奥まで入つて確かめようと思つた。

そして、それに会つた。

六 邂逅

視界の隅で何かが揺れたような気がして、僕ははっと振り向いた。

「杉原さん？」

彼女がうっすくまつているのかと焦つたけど、そこには誰もいなかつた。

画板の積まれた戸棚があるだけだ。安心したような落胆したような気持ちになつて、僕は息をはいた。思ったよりも深いため息になつた。

ここには、やつぱりいないみたいだ。僕はうつむいて、のろのろ入口の方に振り返つた。他の教室を探そう。

そして、ぺたんと、その場に座り込んだ。

驚きのあまり足から力が抜けるなんて、初めてのことだった。

『お前、あの女のにおいがする』

半分透けた魚が、目の前に、宙に浮かんでいた。

ぽかんと口を開けて見上げる僕の前で、魚はゆらゆらと尾ひれを揺らめかせた。泥水に浮かぶ油のようなぬめる光沢を放つて、長いひれは一瞬ごとに色を変える。

『我が見えるのか。加護があるとこいつとか』

魚から目が離せないまま、僕は思わず耳を塞いだ。ひどい声だ。頭の中までキンキン響いて、脳みそに針のよつに刺し込む声だつた。

『だが騎士ではないな。お前は何だ』

魚はぱくくりと口を開けた。とがつた歯の奥に、真っ赤な舌がしまいこまれているのが見える。背筋が粟立つた。

ここには魚じゃない、僕はやつとそう思い至つた。魚に似た、

薄気味悪い、もっと別の何かだ。

お前こそ何だと聞きたかった。でも、喉が引き攣つて息をするのがやつとだった。

『加護があるとは口惜しい』

魚はせせら笑った。確かに笑った。

『あの女以外で、我を見た者は初めてだといつに』

『……杉原さんの』

喉の奥から、恐怖を押しのけて声が飛び出た。思わず、耳に当たった手が外れる。

魚は、杉原さんの話をしている。僕はそう確信した。

それなら、僕はこれの正体を知っている。

『…………』

『ああやはり、わかるのだな』

魚はすい、と僕に近づいた。宙を泳ぐのに合わせて、周りの空気がざわざわのように震えた。

『そんな……』

自分の目が信じられない。

保健室での、うつむいた杉原さんの姿が頭に浮かんだ。あの時、話してくれたこと。全部嘘だと思っていたのに。目の前の存在が、全てを覆す。眩暈がした。

『お前は、何だ?』

魚は再び問いかけた。ゆっくりと、踏みみするように僕の周りを回る。

僕は答えられなかつた。頭が真っ白だつたのだ。目に映るものを感じたくない、思考はとつぶに凍結していた。

『あの女の加護を受けるほど、近い人間なのか』

固まる僕に構わず、魚は続けた。ぐるぐると回るその尾ひれに、僕は取り囲まれた。視界が淀んだ虹色に覆われる。

逃げられない 僕は息をのんだ。

『お前は足がかりだ』

正面で、魚はぴたりと止まつた。瞼のない、間の離れたその目を見えられる。揺らめく極彩色を背に、魚の姿が大きく膨らんだかのように見えた。

『あの女の、悪夢の始まりだ』

魚はくわっと大きく口を開けた。その鋭い歯列に、僕はとっさに腕で顔をかばつた。 食われる！

けれど、とがつた牙が腕に食い込むことも、頭がひとのみされることもなかつた。恐る恐る目を開けた時、そこには何もなかつた。

ただの、狭い空き教室だ。しんと静まり返り、乾いた絵の具と黴のにおいしかしない。あの魚の化け物はどこにもいない。

夢から覚めたような気分で、僕は立ち上がつた。ぼんやり、周りを見回す。

何が起つたのだろう。たつた今まで目にしていたことがひどく遠く、現実感なく感じられた。幻だったのか？夢でも見ていたのだろうか？

深く息をはいて、両手で顔を覆つた。背中が冷たい。ひどく汗をかいているのだと、初めて気付いた。そのくせ、心臓は早鐘を打つている。……それが、夢ではないことの証拠だつた。

あの「悪夢」は、ここにいた。現実だ。

しばらく、動けなかつた。ひどい立ちくらみを起こしたみたいに、目がチカチカした。

杉原さんはどこだ？。僕がやつとそれを思い出した時、昼休み

を終わらせる予鈴が鳴った。特別教室棟の廊下に、わんわんと反響を残して響く。

それに追い出されるように、僕は教室へ戻った。

杉原さんは既に教室にいた。カバンから教科書を取り出している様子に、おかしなところはない。僕はほっとした。

よろよろと席についた時、前に座った吉岡が「なあ今日、この列当たると思う?」と振り向いた。

けれど振り向いてすぐ、吉岡は笑いを引っ込めた。

「嶋本、顔が真っ青だぞ! どうした?」

「大丈夫。ちょっと、頭が痛いだけ」

あまり突っ込まれたくない、僕はすばやく答えた。嘘はついていない。

なんだか、頭が重かった。

頭痛は治まらなかつた。むしろひどくなる一方だつた。よつほどひどい顔色をしていたんだろうか。帰宅した後、沙也にもぎゅっとされた。

「なにその顔色！……お腹でも痛いの？」

心配はありがたいけど、的外れだ。僕はキリキリ刺し込むように痛むこめかみを押さえて、ゆっくり首を振つた。

「なんでもないよ」

ソファにカバンを投げ出して、ため息と一緒に答える。体のだるさが誤魔化せなくて、そのままどかりと座つこんだ。ずぶずぶ、体が沈みこんでいく。

沙也はふうんと呟くと、はいこれ、と一冊の本を差し出した。前に、僕が見た少女漫画の第1巻だ。

意味がわからなくて、眉を寄せて沙也を見上げた。この漫画が、どうしたんだ？

沙也の方も、受け取らない僕に不思議そうに首を傾げる。

「あつくん、読みたいんでしょ？」

何言つてるんだ。だるい腕を持ち上げて、僕はひらひら手を振つた。

「いらないよ」

「この聞言つてたじやんか。女の子が、異世界に行くとかどうとか」心当たりがあつたので、僕はぐつと詰まつた。

杉原さんに「別れよ」と言われた日だ。あの日僕は、ちょっとおかしくなつていたと思つ。確かにいつに、「女の子はどうのくらいの確率で異世界に行くのか」とか何とか口走つたんだ。

そうだ、あの日、杉原さんは「帰つて來た」。

「まあソレ、おもしろいかりさ。読んでみなよ」

沙也は僕の手に、漫画本を押しつけた。思わず受け取ってしまった、僕はその表紙を見つめた。相変わらず、顔の半分を占めるくらい田の大きい女の子だ。線の細い茶色の髪が、ふんわりなびいている。

「……異世界トリップつてさあ、やつぱ夢だよね、女の子の」
その言葉に、僕は顔を上げた。頭の後ろで手を組んで、沙也はおどけてこいつと笑う。

「夢？」

「うん。だつて異世界の冒険だよ、ロマンスだよ。1回やってみたいよねー」

沙也は照れくさを誤魔化すように、肩をすくめた。

「ま、できるなら、だけど」

異世界へ旅するのは、女の子の夢なのか。そのことが、僕には軽く衝撃だった。女の子なら皆、憧れるものなんだろうか。非常への冒険。ここじゃない、どこかへ行くこと。ここで生きること。

杉原さんも、それを夢見ていたのかな。

いつの間にか僕は、異世界のことを現実的に考えていた。嘘とか、夢の中のことではなくて、現実にあることとして。

杉原さんは、本当に行ったんだ。そして帰つて来た。僕はもう、今ではそう信じ切つている自分に気付いた。

昼休みに遭遇した、「悪夢」のせいだ。もつ僕は、自分の田で「異世界」を見てしまったのだ。
疑いの余地はなかった。

「悪夢」に再び会つたのは、すべてのことだった。そいつはその夜、僕の田の前に現れた。

『悪夢とは夜来るものだ。そつだらうへ』

眠る直前だつたから、僕の部屋は電気を全て消して真っ暗だつた。「悪夢」の姿は半分闇に溶けて、目ばかりがてらてらと光つている。僕はベッドの縁に腰掛けて、静かに「悪夢」を出迎えた。なぜだか、昼間のように驚いて腰を抜かしたりはしなかつた。どこかで、そいつがやつて来ることを予感していたのかもしれない。ただ単に、眠くて頭が働かないせいもあつたけど。

『夜こそ我の領分だ。闇とともに悲劇を運ぶ』

やはり、耳に障るざらざらした声だつた。僕は片膝を抱えるような格好で、魚の形をした「悪夢」をぼんやり見つめた。

これが、異世界の証明だ。

『……どうか行ってくれ』

僕には小さな声しか出せなかつた。薄い壁を隔てた向こうの部屋では、沙也が眠つてゐる。

『お前には道ができた。今我がここから去らうと、それは変わらない』

カーテンの隙間からかすかに入る街灯の明かりに、魚の歯がちらりと光つた。

『お前は、足がかりになるのだ』

『杉原さんに、何をするつもりなんだ』

僕は精一杯、「悪夢」を睨みつけた。膝を抱く腕に力が入る。二いつと一人で向かい合つてゐることに、今になつてひどく不安を感じた。

『今こそ、復讐を』

虹色の尾ひれが、夢見るようになに揺れた。そのまま音もなく、魚はするりと僕を取り巻いた。ちょうど、昼間と同じじつに。

『そのために、まずはお前に悪い夢を一つ』

「悪夢」と目が合つ。息が詰まる。

『あの女は、お前を愛していない。あの女が唯一愛する者は、ここ

にはない 「あひら」の騎士だ。』

戦慄を覚え、僕は目を瞠つた。背筋が凍りついた。

魚は全てを見透かしているかのよう、嘲るような薄い笑みを浮かべている。不協和音のような声が、頭に突き刺さる。

『あの女の心は向こうへ渡り、本当の恋に落ちた』

階段を踏み外したみたいに、心臓が一つ大きく跳ねた。

異世界の冒険だよ、ロマンスだよ。

沙也の言葉がよみがえる。そうだ、異世界に行つた女の子は、冒険をして、恋をする。漫画のあらすじは、確かにそうだった。

……杉原さんも？

聞きたくないと思つのこと、僕にはどうすることができなかつた。

指先さえ、自由に動かすことができない。目も耳も、この瞬間、全て「悪夢」に捕らえられていた。

『お前と、この世界で、恋人になつたのは、 ただの抜け殻だよ

八 傀食

暗さに慣れた目には、闇に泳ぐ魚の影がはっきり見えた。忌々しいのに、ゆったり揺れる尾ひれはいつそ幻想的と言つてよかつた。寝そべつて、大きな水槽を見上げているようだ。

『あの女は、この世界でお前と恋人になる一方で、「あちら」の騎士と愛し合つていた。女の心は騎士のものだ』

魚の話は、昨日もその前もずっと同じだつた。けれど僕は、それに慣れることがなかつた。聞くたびに、同じところをえぐられる。飽きもせず、突き落とされる。

『お前は最初から愛されてなどいない。あの女に、弄ばれたのだ。許せるのか?』

耳を塞ぐ気力もなかつた。でも、せせら笑う魚を見ていたくなくて、僕は顔を腕で覆つた。視界が真っ暗に閉ざされる。

けれど、声が頭を搔きまわすのを、防ぐことはできなかつた。

『裏切りだ。裏切りだ。裏切りだ。裏切りだ。裏切りだ。裏切りだ。裏切りだ。裏切りだ』

「消えろよ……」

僕の咳きは、魚に比べればとても弱々しかつた。

怒つて叫ぶことも、魚めがけて枕を投げつけることも、既にやつた。でも何をしようど、「悪夢」を追い払うことはできなかつた。頭がおかしくなりそうだ。

いや、もうおかしくなつているのか?

『許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない』

狂つたように魚は繰り返す。

どれほど固く目をつぶつても、目をそらすことはできなかつた。

「悪夢」の言葉は、僕の心の声だ。

あれから毎晩、「悪夢」は僕のもとを訪れた。

僕をぐるぐる取り囮み、同じ話をささやく。 杉原さんが好き

なのは僕じゃない。異世界の人間だ。これは、裏切りだ。

うるさい！と僕は怒鳴つたし、魚を殴りつけようともした。魚などいなかのように、無視し続けようともした。けれど「悪夢」は、話を信じたくないで抗う僕を、憐れむように笑うだけだった。ぱつくりと口を開けて、『お前は騙されたのだ、かわいそつた』と。

実体をもたない「悪夢」には、拳も言葉も沈黙も、僕の抵抗の全てがすり抜けた。僕が疲れ果てて、覚えもなく眠りに落ちるまで、魚はずっとしゃべり続けた。

魚は実体がなくとも、僕は生身の人間だ。家族には、夜中に僕が1人で暴れていると思われているようだつた。

「悪夢」とやり合つた翌朝、母さんが怯えた顔で「何か悩みがあるの？」と聞いてきた。父さんも沙也も、そ知らぬ顔で朝食をとりながら、僕の様子を探つてはいるようだつた。それがあつて、僕はあいつを追い払うことを諦めた。

どうしようもない。魚はただ現れて、しゃべり続けるだけだ。それ以外の実害はなかつた。ただ僕が最悪な気分になつて、寝不足になるだけだ。

少しずつ、僕の食欲は失せたし、頭痛も頻繁に起つるようになつた。学校には行けるけど、絶えず疲れたような倦怠感が抜けない。授業にも部活にも、身が入らない。

でも、どうしようもなかつた。

こんなこと、誰にも言えないから。

「嶋本、お前大丈夫か？」

前の席の吉岡がそう声をかけてきたのは、「悪夢」と初めて会つてからちょうど一週間たつた日だつた。

「目の下、すげえクマだぞ。顔色も悪いし……」

吉岡が、僕の顔を覗き込む。心配そうなその目から逃れたくて、僕は頬杖をついてうつむいた。

「そうかな……」

「だつてお前、さつきの授業寝てだらう？ 寝不足？」

その通りだつたけど、僕は苦笑で誤魔化そうとした。

「寝てねーよ。前の席なのに、なんでわかるんだよ」

「だつて、いびきが聞こえた」

眉を寄せて吉岡が言つ。僕は笑いが引っ込んで、思わずまじまじと吉岡を見返した。

「……嘘だー」

「マジだよ」

うわーと思わずうめいて、僕は天を仰いだ。両手で顔を覆つて、大きく息をはく。

教室でいびきをかくなんて、めちゃくちゃ恥ずかしい。寝不足が続いていたとはいえ、大失態だ。

「……いびき、大きかつた？」

心配になつて聞くと、吉岡はニヤリと笑つた。

「おう。先生もほつとけつて、呆れてたぞー」

バーかと笑う吉岡から、気まずくて顔をそむけた。

そむけた先で、杉原さんと不意に目が合つた。遠い席から、杉原さんは眉をひそめてこちらを見ている。

大丈夫？

そんな声が、聞こえてきそうな顔だ。杉原さんはたぶん、僕を心

配してくれていい。

けれど、僕の胸に湧き上がったのは怒りだった。

杉原さんには関係ないだろ。心配なんて嘘。どうせ僕のことを、授業中にいびきをかくなんて、馬鹿なやつだと思っているんだ。コントロールできない強い憤りに、僕自身が困惑った。

どうかして。杉原さんに、そんなことを思つなんて。きっと、寝不足で気が立つているんだ。

もやもやした気持ちを抱えたまま、僕は目を瞑った。

「新くん」

階段の踊り場で、杉原さんに呼び止められた。教室移動の最中だつた。

振り向くのが、ひどく億劫だつた。僕は、わざと彼女を避けていたから。

杉原さんは制服のスカートの端をぎゅっと握りしめ、決意をもつた瞳で、僕を見つめている。

あ、少し顔色が良くなつたな、と思った。杉原さんは険しい表情をしているけど、少し前よりはずっと健康そうな様子だ。目に力があるし、引き結んだ口元にも、本来の滲刺さが戻っているように感じた。

元気になつたんだ、よかつた。そう思つたはずなのに、僕の口から出たのはよそよそしい言葉だった。

「……何か用？」

「新くん。夜、眠れる？」

杉原さんは真つすぐ聞いてきた。

「ひどい顔だよ。すぐ、疲れてるみたいだし。あのね、もし、何か悩んでいるなら」

「うるさいな」

何か考えるより先に、そんな言葉が飛び出た。自分でも理由がわからぬくらい、気分がささくれて苛立つている。

何か悩んでいる？ そうだ、悩んでいるに決まつて。そもそも、全部杉原さんのせいじゃないか。

「杉原さんには、関係ないだろ」

杉原さんから目をそらして、僕は窓の外を見た。薄暗い踊り場とは対照的に、外はからりと晴れている。白いグラウンドが、やけに遠くに感じた。

「でも、新くんは
杉原さんは、なおも言いつのりとした。僕は正面から、杉原さんに向か合つた。

自分が、ひどく意地悪な顔をしているとわかつた。

「……そつちから、切り捨てたんじやないか。もう僕に、関わりたくないんだろ？ 別の奴が好きなんだから」

杉原さんが息をのんだ。灰色がかつた瞳が揺れる。

僕と杉原さんの間にある溝が、今や決定的となつたのだ。僕がそうした。わかつていてやつたのに、傷ついた杉原さんの顔を見ていたくなくて、僕はうつむいた。

「……もう、放つといってくれよ」

そう吐き捨てて、僕は逃げるよつた階段を駆け降りた。杉原さんは、追つてこなかつた。

魚はなぜか、ひどく上機嫌だつた。いつもよりせわしなく宙を泳ぎ、尾ひれを大きく波打たせた。極彩色のグラデーションも、目が眩むような変化を繰り返す。

ベッドの隅で壁にもたれて座り、僕はぼんやりとそれを眺めていた。

今日も、眠れないのかな。

『あの女の顔見たか？あの驚きに瞪られた目を』

夜ごと杉原さんの裏切りを繰り返す「悪夢」は、今日は様子が違つた。昼間のことを、弾んだ口調でしきりに話している。ギザギザの声はぐんとピッチが高くなり、耳障りさが増した。

『お前に傷つけられるとは、思いもしなかつたのだろうよ。だから驚いたのだ。お前を、悔っていたのだ』

衝撃に打たれたような、杉原さんの表情がよみがえった。

あんな顔、初めて見た。

僕にとつての杉原さんは、いつも笑っている人だった。みんなから失笑をかうような僕の下手な冗談に、じろじろ楽しげに笑つてくれた。彼女の前で緊張して、僕がぎこちない行動をとつた時も、決して馬鹿にすることなく、ただ穏やかに微笑んで見つめてくれていた。

いつも杉原さんの笑顔には、包み込むような温かさがあった。だから僕も、彼女の前では普段よりも多く笑つていたんだ。

ああでも、あれは偽物なんだっけ。

『あの女を見返してやつたのだ。あの女に傷つけられた分だけ、お前もあの女を傷つけることができるのだ。 どうだ、気分がいいだろう?』

杉原さんを傷つけたことなんて、もう既に思い出したくもない、最悪なでき』ことだ。もう一度と、彼女のあんな表情は見たくない。あんな表情をさせることを、一度としたくない。

けれどあの時、僕は確かに気分が良かつた。杉原さんの表情が歪んで、ひどく暗い喜びを感じた。自分の手で彼女を傷つけることができたのが、嬉しかったのだ。

とんだ最低野郎だ。自分がこんな醜い感情の持ち主だなんて、知らなかつた。もしかしたら、この僕の醜悪さを直視したくないから、思い出したくないだけなのかもしねり。

『どうだ?』

「悪夢」が共犯者のように、口をやつと笑う。僕は目を閉じた。

「……そうだね」

僕は初めて、「悪夢」に同意した。

「いつの言葉はたぶん、
　　真実だ。」

十 ホットミルク

深夜番組がこんなにつまらないとは思わなかつた。テスト前の夜、勉強の息抜きに見る時は、おもしろすぎてついいつい延々と見てしまうのに。惰性でテレビをつけてみても、何にも入り込めない。番組がアイドルの水着コーナーとかだつたら、まだおもしろく見れたかもしれない。けどあいにく画面の向こうで繰り広げられているのは、トークバラエティーだつた。どうでもいい話をする人々を、僕は冷めた気持ちで眺めた。

リビングのソファに座つて、僕はぐずぐずと起きていた。僕以外の家族はみんな、既に布団に入つていて、だからテレビの音量も、最小限に落としてあつた。正直、笑い声以外何を言つているのかわからない。けどあまり見る気もないから、聞き取れなくても構わなかつた。

なぜ眠らないのか。その理由は一つだ。

「悪夢」が、恐ろしいから。

部屋に入つてベッドにもぐりこんだら、あいつが出てくるのはわかつていた。あの毒々しい姿を見たくない。あの声を、真つ暗な言葉を聞きたくない。

要するに、僕はあの「悪夢」が怖いのだ。あいつの言葉にぐらぐら揺さぶられ、不安を植えつけられるのが嫌だつた。魚が僕の周りを泳ぐと、ベッドに縫い付けられたように動けなくなる。夜が深く重く覆いかぶさつてきて、絶望的に息苦しくなる。

その全てが怖かつた。

自分が情けない。あんな実体のない魚に、こんなにも怯えるなんて。

でも、どうしようもなかつた。僕にできるのは、じつじつ「悪夢」が現れないよう、起きていることだけだつた。

眠れないでいるよりも、起きている方がまだマシだ。

「 部屋で寝なよ、あつくん」

急に声が聞こえて、僕ははつとして顔を上げた。

目の前のテレビは、まだついている。慌てて周囲を見回すと、リビングの入り口に沙也が立つていた。眩しそうに目を細め、あくびをかみ殺している。

どうやらいつの間にか、寝入つてしまつていたようだ。僕はしおぼしおぼかすむ田をこすつた。沙也につられて、大きなあくびが出来た。

「 ……まだ起きてるつもりなの？」

さつきより少しはつきりした口調で、首を傾げて沙也が聞いた。僕はぼんやりしたまま、あやふやに答えた。

「 ん、まあ……」

「 ふうん」

関心が薄そうに呟くと、沙也は静かにリビングに入つて、冷蔵庫を開けた。

喉でも乾いて、起きてきたのだろうか。なんとなく沙也を田で追いかながら、僕はうまく働かない頭で考えた。

マグカップに牛乳を注ぎながら、沙也は何の気なしに言つ。

「 あつくん、眠れないんだ。彼女と何かあつたとか？」

意外にも図星を突かれて、僕は眠気が少しどんだ。

いつも外れなくせに、どうしてこんな時だけ鋭くなるんだ。ちよつとムツとして、僕は黙りこんだ。何も事情を知らない沙也に、あれこれ言われたくなかった。

沙也はマグカップを、そのまま電子レンジに入れた。そして牛乳を温めている間、じこじこと台所の棚を探り出した。

こんな夜中に、一体何をしているのだろう。僕はますます不審に思った。腹が減っているのだろうか。こんな時間に食うと太るぞと、嫌味を言つてやろうか。

「……何してんの？」

耐えきれなくなつて、僕は尋ねた。沙也は「んー？」と、眠そうな柔らかい声で返した。

「眠れないあつくんに、プレゼントだよ」

温めた牛乳に、沙也は棚から出した蜂蜜をところごと注いだ。入れすぎだら、と思うくらいだ。それをスプーンでかき混ぜながら、沙也は僕の方に近づいてきた。

はい、と白いマグカップが差し出される。

「沙也特製ブレンドのホットミルクです。どうぞ」

ほのかに湯気を立てている牛乳と、沙也の顔を、僕は交互に見つめた。ついつい、ぽかんとしてしまう。

「なんで？」

なんで僕に、ホットミルク？

ぽろりと出た僕の疑問の声に、沙也は明らかに気分を害した顔をした。ぐいと、温かいマグカップを僕に押しつける。

「いいから、早く受け取りなよ。せっかく作つてあげたんだから」

頼んでもないのに、どうして怒るんだ。ちょっと理不尽に思つたけど、僕はカップを受け取つた。ふわりと、特有の甘いにおいが鼻をかすめた。

沙也はテーブルの椅子をわざわざ引つ張つてきて、それに行儀悪くあぐらをかいて座つた。

「これで、借りは返したからね」

カップに口をつける寸前、その満足そつた言葉を聞いて、僕は手を止めた。

「借り？」

何か僕は、沙也に貸しがあつただろうか。記憶を探るけど、全然

心当たりがない。

首を傾げる僕に、沙也は不満げに肩をとがらせた。

「覚えてないの？」　もともとそれは、あつくん特製ブレンドだったでしょ？

僕特製ブレンド？思わずホットミルクをまじまじと見つめる。

これを作ったことなんて、あつただろうか？

「去年私が受験生だった時、あつくんが作ってくれたんだよ。私が夜中、ストレスでキレてた時に。『これ飲んで、寝ろ』って言ってそれを聞いても、やっぱりよく思い出せなかつた。

でも言われてみれば、そんなこと也有つたかもしない。去年、沙也は高校受験を控えて、一時期とても不安定でピリピリしていたことがあつたから。当たり散らされるのが嫌で、僕は当時沙也にあまり関わらないように遠巻きにしていた。でも、レベルの高い難しいところを受ける奴は大変だなあと、ちょっと氣の毒に思つていたんだ。

「私、ホットミルクってくさみがあるからあまり好きじゃないけど、その時はすごくびっくりしたんだよね。効果抜群だったから。一口飲んだだけで、トゲトゲした気分がおさまっちゃったの」

椅子にもたれて、沙也は懐かしむように目を眇めた。

話につられて、僕もミルクを一口飲む。

甘つたるい。

けれど僕は続けて、一口、三口と飲んだ。

「ただ牛乳を温めただけなのにね。不思議だよね」

それだけ言つと、沙也は「じゃ、おやすみ」と立ち上がつた。

「あつくんも、早く寝なよ」

リビングを出る直前、沙也は振り返つてそう言つた。

マグカップに口をつけていたので、僕は手を振るだけで答えた。妹に氣を使われるのは、嬉しい半面、兄としてはちょっときまつが悪かった。

でも、沙也の話は本当だった。甘いホットミルクを飲むこと、
気分が落ち着いていくのがわかる。蜂蜜が多くて甘すぎると思つた
に、結局、僕は全部飲み干した。

しばらくすると、自然に眠くなつてきました。あぐいをしながら歯を
磨いて、僕は部屋へ戻つた。ベッドにひざじと横になると、眠りは
すぐに、やつてきた。

その日、「悪夢」は来なかつた。

十一 対峙

「新、部活行こうぜ」

教室の入り口からひょいと顔をのぞかせて、和志がほがらかに言った。

いちいち、迎えに来るのはやめてほしい。僕は面倒くせに眉を寄せながら、カバンを肩にかついだ。

「……迎えに来なくても、ちゃんと行くよ」

「いやいや、別に、俺が新と行きたいだけだつて」

嘘くさい笑顔を浮かべて、和志は白々しく言つ。

何が一緒に行きたいだ。僕にはわかってる。こいつは、見張り役のつもりなんだ。

早退事件があつてから、僕は部活内できょと腫れものに触るような扱いを受けていた。部の女子たちから、変に心配されたり、励まされたりしている。

あの赤川さんからも、気を使われているようだつた。僕が音を外した時、それを指摘する赤川さんの言葉の鋭さが、いつもの3割は減つている。むしろ、いつもが気まずくなるくらいだつた。

つまり合唱部の全員に、僕がふられたことが広まつているらしいのだ。こうじう時、女子の割合が高い部活は本当にウワサが早い。男連中は和志以外、情けで知らん顔してくれる。でも女の子たちの憐れみの視線は、正直部活へ行きたくなくなるほどだつた。

「今日、パート練は何やんの？」

「そうだな、重唱の仕上がりが遅いから……」

言いながら廊下に出て、パート部屋の教室へ歩き出す。その時だつた。

「新くん、ちょっといいかな」

杉原さんが、追いかけてきた。

隣の和志がぎくりと足を止めたので、僕も仕方なく立ち止まつた。振り返ると杉原さんが、笑みを浮かべて立つてゐる。けれどその田は、ひどく真剣だつた。

和志が焦つたように、僕と杉原さんへ交互に田配せした。その視線を無視して、僕はできる限りそつけなく言つた。

「「めん、部活あるから。 和志、行こ」」
けれど、杉原さんは引かなかつた。和志がまじつこて動かないうちこ、にっこり笑つて言つた。

「「めんね、長谷川くん。 部活の人に、新くんは遅れるつて言つてもらえるかな」」

「う、うん……」

戸惑いながらも、和志は頷いた。一度ちらりと僕の方を見たけど、そのまま身を翻して、逃げるように走り去つた。

僕は舌打ちしたい気分だつた。どうして、あいつは杉原さんの言うことを聞いたんだ。放つておいてほしいとは思つたけど、何もこのタイミングでいなくならなくてもいいの。」
杉原さんは改めて、僕に向き直つた。

「そんなに長くはからないから。話せない？」
「……わかつた」

諦めて、僕は頷いた。

杉原さんの後についてやつてきたのは、特別教室棟だつた。

「悪夢」に、初めて会つた場所。前と同じく薄暗くて、しんと静まり返つてゐる。グラウンドに響く運動部のかけ声も、ここからは遠い。

普段この時間は、金管バンドが棟を占拠してゐる。けど、今日は金管バンドが音楽室を使って合奏をする日だ。だから合唱部は音楽室を明け渡して、パート別に練習をする。僕は男声のリーダーだか

ら、本当は誰より早くパート部屋へ行つて、練習を仕切らなきゃいけない。

でもどうせ、名ばかりのパーティーだ。男声はみんな勝手に、個人練習を始めているだろう。

杉原さんは特別教室棟の突き当たりまで、すたすたと歩を進めた。そして一番奥の、物置となつている教室の扉を開けた。ちょうど、前に僕が入つた美術準備室の、隣の教室だつた。

「中で話そう。……邪魔が入らないように」

杉原さんは中を指差して、僕を促した。僕は黙つて扉をくぐる。物置教室は、使つていない机と椅子が壁のように高く積まれていた。ブラインドの隙間から傾いた日差しが薄く入つて、部屋を舞うほこりを白く光らせている。あまり、長居はしたくないよつな場所だ。

「……それで、何の用？」

急かすつもりで、僕は聞いた。杉原さんは扉をぴつたりと閉じると、僕を真つすぐに見つめた。

明るい灰茶の瞳に、吸いこまれそうだ。

「新くん。あなたは、『悪夢』にとり憑かれています

何を言つてるんだ、と僕は笑おうとした。けれど口から出たのは、僕の言葉じゃなかつた。

『その通り。だがもう遅い』

その瞬間、視界が虹色に燃えた。

目がおかしくなつた！

僕は動転して、とつさに両手で顔を覆おうとした。けれど、指一

本さえ、動かなかつた。

体の「曲がりかない」ハーフケを起した感情とは裏腹に、実際

の僕は小揺るぎもせず立ったまま、薄ら笑いを浮かべていた。

喉をこじ開けて、僕のものではないギザギザの声が出る。自分の体なのに、全くコントロールできない。雁字がらめに縛られたような、ひどくおかしな感覚だった。

僕の視界は歪み、流動する暗い虹色で覆われていた。吐き気がするような「悪夢」の色だ。その中で、ただ杉原さんだけがくつきりと正常な色と形をして、浮かび上がっていた。杉原さんは、こちらを厳しい表情で睨みつけていた。

「新くんから離れない。お前の敵は、私でしょう」

「僕はこやつと笑つて、僕を指差した。

杉原さんもまた立ったよつて、元気をつゝ上げた。

「新くんを巻き込むなら見過」せない。 その人は、関係ないの。

解放しなさい」

関係ない。

そうなんだ。僕と杉原さんは、もう何も関係がない。
彼氏彼女じ
やないし、杉原さんの好きな奴は僕じゃない。

「悪夢」や異世界について、僕たちは共有しているようでいて、全くそうじゃなかつた。僕は本当は、杉原さんのことなんか全然知らないんだ。

そのことが急に、とても悔しくて憎らしくなった。杉原さんに対し、強い憤りが湧き上がる。僕は拳を、ぐつと強く握りしめた。

関係ないだつて？馬鹿にしてるのか？

「僕」「僕」の口から、上ずつた笑い声が飛び出した。

『そりだ、あの女を憎め。その憎しみで貫け。　　あの女を、消してしまえ！』

僕ははつとした。気付けば指先に、自分の感覚が戻っていた。拳を握つたはずの手が、冷たい。僕は呆然と、右手を見下ろした。

いつの間にか僕は、一振りの剣を握つていた。

十一 対峙（後書き）

パーティー＝パーティーダー です。
うつかりしてましたが、一般用語じゃないですね、これ…

十二 わかりたい

意識した途端、手にずっとしりとした重みがかかった。

幻じやない、本当の剣だ。

僕は呆然としたまま恐る恐る、剣を持ち上げた。鋼の重みで取り落としそうになつて、慌てて両手を使う。

視界の色に溶け込むような、「悪夢」の色をした剣だつた。けれどよく研がれた刃と、柄の先に嵌まつた玉は、何の光も弾かないほど黒い。夜を閉じ込めたような暗い色だつた。

『それはお前の憎しみだ。我が手を貸してやつた。　お前の剣だ』

頭の中で、「悪夢」がささやく。

武骨な剣だつた。刀身の長さは指先から肘くらいまで、全体的にのっぺりと幅が広く、鈍器のようだ。すらりと腰に佩く剣ではなくて、小人が野蛮に振り回すような。

こんなにも重くて、冷たい。真つ黒な刃からは、一つの意図しか感じない。

これは、人を斬りつけるための、道具だ。

それがわかつて、背筋が寒くなつた。

今僕が持つてゐるものは、人を傷つけるための武器だ。凶器となるものだ。おぞましく感じられるのも当然だつた。なんて醜い剣だらう。

これが、僕の？

ぞつとした。もう持つていられなかつた。僕は、剣を投げ捨てようとした。

でも、手が離れない。

「何だ、これ……！」

必死になつて、柄を握る右手を開こうとする僕に、「悪夢」が怒

鳴つた。

『何をしている 剣を捨てようといつのかー!』

「悪夢」は煙がわつと立ちのぼるように、突然僕のすぐ目の前に現れた。牙をむき出し、血走った目で睨みつけてくる。

『あの女が許せないのだろう。ならば斬れ!』

そんなこと、できるはずがない。

「悪夢」は恐ろしい形相だつたけど、僕はそれどころじやなかつた。一刻も早く、この剣を手放したくてたまらない。ぐつと力をこめて、右手を振つた。ガチャガチャと、剣がいびつな音をたてた。

『馬鹿な!』

「悪夢」が吼える。

「……こには、『あちら』とは違つのみ」

静かな声がして、僕ははつとして動きを止めた。

杉原さんだつた。凜とした表情で僕を　いや、「悪夢」を見つめている。水面のような瞳は、あくまでも平静だつた。

「新くんは『あちら』の騎士じやない。剣を持つても、考えることには『あちら』の人とは違つ。……新くんは、こっちの世界の人だから

「

落ち着き払つて、杉原さんは「悪夢」に言い放つた。

「お前は、それを間違えたんだ」

『この、腰ぬけが!』

「悪夢」は怒り狂つて、わめき散らした。長い尾ひれが、発光するように激しく色を変える。

けれど僕は反対に、落ち着きを取り戻していた。杉原さんの目を見て、訳のわからない恐怖に圧されていた心が、すつと戻いだ。

不気味な剣を早く捨てたいのは変わらない。けど、やつと少し周りが見えるようになつた気分だつた。

歪んだ色彩の中で、ただ一人杉原さんだけが変わらない姿を保つて、背筋を伸ばして立つている。制服の白さが、濁つた周囲の中でも

は眩しいほどだった。

異世界で、特別な存在だったといつ杉原さんを、垣間見た気がした。

ああそういうえば、杉原さんの話を聞いていない。

僕はふと、そのことを思い出した。ここに「悪夢」に出来た前、本当は杉原さんを追いかけ、話をしようと思つていたんだ。何を考えているのか、彼女の心が知りたいと。

でもそれから、僕の方から避けるようになってしまったんだっけ。僕は知らず知らずの内に、杉原さんと話をする機会を逃したんだ。なぜあの時元気がなかつたのか。なぜ皆を避けていたのか。それを知る大切な機会を、失つてしまつた。

僕はやつと、そのことに気付いた。頭の中のもやが晴れていくようだつた。

……杉原さんのことを行も知らないのは、僕自身がそれを避けたせいだ。

「……杉原さん」

呼びかける声はかすれた。杉原さんははつとして、僕を見た。

「新くん、大丈夫?」

僕は頷くことも忘れて、彼女を見つめた。心配そうな、その表情を。

今からでも、わかることができるのだろうか。杉原さんのことを。

「異世界に、『あちら』に好きな奴がいるって、本当?」

大きく瞪つた瞳が揺れた。杉原さんは不意打ちに竦んだよう、元の胸元のリボンをぎゅっとつかんだ。

けど、杉原さんが動搖を静めるのはすぐだった。一度目を伏せて、再び顔を上げた時、彼女はふと微笑んだ。

「本当だよ」

わかつていた答えだけど、やっぱりつらかった。全部吹つ切つたような杉原さんの顔を、真つすぐは見れなかつた。
「……だからあの日、帰つてきたときに、『別れよつ』つて言つたの？」

ゆつくつと杉原さんは瞬いた。複雑に動いた感情を抑え込むように、一度口元を引き締めてから、言つた。

「……それも、ある」

ずいぶん、いろんなものを含んだ答え方だった。
けど、僕は追及しなかつた。聞きたいこと、話したいことは、まだまたたくさんあつた。

「どんな奴？……杉原さんの、好きな奴は」「えつ？」

虚をつかれたように、杉原さんはぽかんとした。そして口元に手を当てて、考え込むように目を伏せた。

「そうだね。……厳しい、人だったよ。自分にも他人にも。騎士として、責任感の強い人だった」

まぶたにそいつの顔が浮かんだんだろうか。杉原さんはふと、柔らかく笑つた。

見たことのない、笑みのかたちだった。

「でも、優しい人だった」

「そつか……」

何とも言えず、僕はそんな相づちを打つた。もし手が自由だったら、がりがり頭をかいていたと思つ。

自分で傷をえぐつているみたいだった。杉原さんに別の奴のこと

をのろけられるなんて、最悪だ。ショックでひどい気分だった。

でも、知りたいと思つたのは僕なんだ。

「そいつはさ

「新くん。この話、また今度ちゃんとしよつ」

杉原さんが急に、強く遮つた。

「今こんなこと、話してる場合じやなかつた」

彼女の目はもう、僕を見ていなかつた。宙に浮かぶ魚を、厳しく睨みすえていた。

『だがお前に、何ができる?』

「悪夢」は僕が間抜けな質問をしている間に、余裕を取り戻したようだつた。ばかりと口を開け、嘲け笑つて杉原さんを見下ろした。『この男が剣を欲しないというのは、確かに我の誤算だつた。だがお前は最早ただの人。脅威ではない』

悠々と、魚は僕の頭上を泳いだ。杉原さんはぐつと唇をかむと、険しい表情のまま僕に振り向いた。

「新くん、お願ひ。『悪夢』を遠ざけて!」

「え?」

激しい口調のその指示に、僕は途方にくれた。

遠ざける、と言われても。呆然とする僕に、杉原さんはぎびきびと言つた。

『『悪夢』は新くんにとり憑いたから、力を得ているの。新くんと切り離せば、こいつは弱くなるはず』

「う、うん。でも

僕はまたガチャガチャと、剣を揺すつた。

「どうやればいい?離れないんだ。この剣も、魚も

これまでの夜に何度、『悪夢』を追い払おうとしただろつ。でも何をしても、全て魚の体には届かなかつた。僕が『悪夢』に対しても

無力なことは、もつ十分身にしみている。
こいつを遠ざけるのは、僕には無理なんだ。

「魚?」

杉原さんは驚いたように瞬いた。

「新くんは、『悪夢』が魚に見えるの?」

「違うの?」

僕も驚いた。間違えよつもなく、『悪夢』は魚の姿をしてくる。
もちろん、とがった歯や赤い舌なんか、普通の魚とは全く違うナビ。
杉原さんはつかの間呆然としていたけど、片頬を上げてふつと苦笑した。

「 そうか、本当に人によつて、違うんだね

どういふこと、と僕は問い合わせ返そつとした。でもその隙はなかつた。
魚が再び田の前に下りてきたのだ。

尾ひれを扇のよつに広げ、『悪夢』は僕と杉原さんの間に立ちふさがつた。その近さに、僕は息をのんだ。

『お前もこれ以上使えぬ。 我がやろつ』

長いひれが僕を飲み込んで、閉じ込める。周囲の何もかもが見えなくなつた。

「新くん!」

悲鳴のような、杉原さんの声が聞こえた。

いつかと同じように、ぬるりと膜をはつたような『悪夢』の田が、
僕を見すえた。魔法にかけられたように、それに囚われる。思わず手の中の剣を、すがるよつに握りしめた。

『さあ、お前を明け渡せ』

ダメだ。僕は固く田をつむつた。

『あ、と田をつむつて身を固くする僕が、まず思い出したのは何においだつた。

真つ暗な闇の中に、まるで白い手が優しく差しのべられたかのようだつた。甘いにおい。覚えのある、温かいにおい。

これは、何だつただろう。僕は夢中で、そのにおいの記憶をたべりよせた。藁にでも何でも、すがりたい気分だつた。この「悪夢」から、逃れられるなら。

白いマグカップ。温かい湯気。甘い、蜂蜜が多すぎるんだ。やつとにおいも味も思い出して、思わず肩の力がすとんと抜けた。

ああ、これはホットミルクだ。

眠れなかつた夜に、沙也がつくつてくれたやつ。甘つたるかつたけど、僕は全部飲んだんだつた。

ただ牛乳を温めただけなのにね。不思議だよね。

あの時の、沙也の声がよみがえる。

本当に、不思議だつた。ただの飲み物なのに、まるで万能薬のようだつたから。不安や恐れを安らぎに変えて、眠れない夜を打ち破つたのだ。効果抜群、特製ブレンンド。沙也の言つとおり、あれはすごかつた。

あの夜、「悪夢」はやつて来なかつたのだから。

僕は目を開いた。視界を覆つた毒々しい色は、消え失せていた。

『馬鹿な』

呆然としたような、「悪夢」のうめき声がした。

急にもとの色と形を取り戻した視界に、僕自身とても戸惑つた。何度も、瞬きを繰り返す。何もおかしなところのない、いつもの正

常な世界が、こんなにも安心するものだとは思わなかつた。

田を慣らすために、周りを見回す。僕のすぐ横に、魚は浮かんでいた。ぽかんと、力なく口を開けている。なぜか魚の姿が、急に小さくなつたように感じた。

「す、」「い……」

杉原さんも驚いたように、何度も瞬いた。宙に浮く「悪夢」と僕を見比べて、呆然と問いかけてきた。

「今、どうやつてやつたの？」

「いや……、あ」

僕は首を傾げるしかない。

今、僕は何かをしたのだろうか？ 田を閉じていたから、全然わからない。ただ縮こまつて、ホットミルクのことを思い出していただけ。唯一僕が、「悪夢」を遠ざけた夜のことを。

見える景色は元に戻つたけど、手の中の剣は相変わらず、へばりついて離れなかつた。それに田を落として、もう一度何とか手を開こうと試みる。正常な世界で見る剣は、その異様さが際立つていた。

「悪夢」の剣なのだと、はつきりわかる。

『ふざけるな！』

耳をつんざくような罵声を吐き、「悪夢」は牙をむき出しにした。

『この男の加護はそれほど強くなかったはずだ。何をした？ 力を隠していたのか！』

「……私じゃないわ」

杉原さんはゆるゆると首を振つた。

「私は何もしてない。もう、何の力もないから」

淡々とした口調だつた。悔しさも悲しさも読みとれない。拳をぐつと握り締めて、杉原さんはまだ静かな表情で、「悪夢」に向かい合つていた。

対する魚は激昂していた。体が攻撃的に膨れ上がり、わめく声は金属を引っ搔いたようにかん高い。

『今更、命が惜しくなつたのか？ 我を謀つたか。罰を受け入れると

言つたのは、偽りだつたのか！』

「言つた。それは嘘じやない」

杉原さんはきつぱりと言い切つた。

「でもお前は、新くんを巻き込んだ。それは許せない。……私のところだけに来ればよかつたのに」

なぜか彼女の口調は、「悪夢」を責めるよつだつた。

「私だけにとり憑いていたなら、あのままお前の望み通りだつたよ。私は邪魔しなかつた。私だけなら」

「ちょ、ちょっと待つて」

僕は慌てて割つて入つた。とても黙つて聞いていられなかつた。

「悪夢」と杉原さんが何を話しているのか、全然わからない。わからないけど、聞き捨てならなかつた。

「……どうじこつこと？」

僕は杉原さんをじつと見つめた。その静かな表情に、彼女の心の

ヒントが映りこまないか、必死で探る。

「『悪夢』の望み通りつて、何？」

焦りを感じて、僕は重ねて聞いた。

僕が「悪夢」に遭遇する前のことだが、頭にフラッシュバックする。あの時、杉原さんは元気がなかつた。顔色が悪くて、みんなを避けっていた。まるで存在が薄くなつて、遠くへ行つてしまふかのようだつた。

僕は、杉原さんがどんどん透明になつていいくみたいで、怖かつたんだ。

「 杉原さんは、消えたいの？」

あの時、「悪夢」が僕にねらいをつける前、杉原さんの方を訪れていたのだとしたら。そしてそれを、杉原さん自身が受け入れてい

たのだとしたら。

それが、元気のなかつた理由だらうか。杉原さんは「悪夢」にとり憑かれても構わないと、そう思つていたのだろうか。

なぜ？

僕は愕然として、杉原さんを見つめた。

杉原さんは困つたようにふつと微笑んで、目を伏せた。でも、何も言つてはくれなかつた。その沈黙に、僕は息をのむ。

本当に、僕は何も知らないんだ。

衝撃に打ちのめされそつた。杉原さんのこと、全然知らないつて、わかつてはいたけど。本当にかけらさえ、僕は理解していいのかもしけない。

「悪夢」の望み通りになつていいと、消えてしまつてかまわないと、杉原さんが思つていたなんて。

体中の力が抜けそつた。無力感に、僕は呆然とした。杉原さんのこと、異世界のこと。まだ僕は、ほとんど打ち明けてもらつていなんだ。

また杉原さんに対して、怒りがわいてきそつた。失望を感じて、僕はうつむいた。

下げた視線の先に、「悪夢」の色をした剣がある。

柄の先に嵌めこまれた真つ黒な玉を見ているうちに、僕の怒りはだんだん強くなつた。　杉原さんにじやない、僕自身に対する怒りだ。

打ち明けてもらつていないつて、そりやそうだ。誰がこんな奴に、大切な話をしたいなんて思うだろ？全然頼りにならない、何もできない、そのくせ心にこんな醜い剣を隠し持つていた奴。

こんなんじや、ふられて当然かもしけないな。

僕は初めて、そう思つた。杉原さんに別の好きな人がいなくとも、

「こんな僕では、やっぱりダメだったかもしれない。」

この剣で杉原さんを傷つけたいと、ちょっとでも思つてしまつた
ような僕では。

自分が情けなくて、僕は目を閉じた。

でも好きなんだ。どうしたらしい？

『　思い出せ、お前は裏切られたんだ。許せないと、傷つけたい
と、思つたんだろう。ならば憎しみをもつて剣を振れ！その女を、
葬るんだ！』

「悪夢」はわめきながら、僕の周りをぐるぐる回つた。
でも、力が弱まつたことは一目瞭然だつた。虹色の体はさらに透
き通つて、耳障りな声もどこか遠い。だから僕は簡単に、無視する
ことができた。

杉原さんだけに、集中できる。
大好きな彼女しか目に入らない。

「……あのさ、花火大会のことなんだけど」

笑うつむりはなかつたけど、もしかしたら僕は、微笑んでいたか
もしれない。自分でも驚くくらい、穏やかに話すことができたから。
「覚えてる？あの時のこと」

これはちょっとした賭けだった。

杉原さんは真顔になつてまじまじと僕を見つめてから、少しだけ
笑つた。苦笑じやなればいいと、僕は思った。

「　心がこっちに戻ってきた時ね」

杉原さんはゆっくりとしゃべり始めた。

「不思議だつたけど、『あけら』にいた私とこちらの私が、すつと
溶け込むみたいに一つになつたんだ。どちらも私だつた。合わさつ
た時、どちらが消えることもなかつた。だから、

杉原さんの笑みが深くなつた。

「……ちゃんと、覚えてるよ」

よかつた。僕はうつむいて、笑顔を隠した。

照れくさむより、嬉しさの方が大きかつた。なかつたことになつているのだと、ずっと思つていたから。花火大会に言つて、初めてキスしたこと。僕だけしか覚えていないのだと思つていた。

その思い出が大切で特別に感じているのは、僕だけなんだつて、ずっと悔しくて腹が立つて、悲しかつた。

でも、覚えてくれた。

その少しの特別に、すがりたかつた。

こつちに残つていた杉原さんも、紛れもない杉原さんだというなら、まだ、望みはあるんじやないか？ふられたけど、僕が諦める理由にはならない。だつて、全部が偽物で嘘だつたわけじゃ、ないんだ。

もしあなたに、チャンスがあるなら。

「じゃあ、杉原さん。……消えないでよ」

杉原さんが消えたいと思つても、僕は消えてほしくない。やり直したいし、ちゃんと向き合いたい。今度こそ、杉原さんのことを知りたい。

顔を上げると、杉原さんはちょっと呆然としているように見えた。途方に暮れたようなその顔に、僕は笑いかけた。そして、「悪夢」に向き直つた。

「悪夢」の方も、ぽかんとしているようだつた。あれだけ堂々と揺らめいていた尾ひれも、今はしぶんで、布切れが引っかかっているくらいにしか見えない。こいつをなぜあんなに恐ろしく思つたのか、もうわからなかつた。

「僕は杉原さんを消したいとは全く思わない。むしろその逆だ。

だから、これはいらぬ」

今なら、剣を手放せたと思った。憎しみなんか、もうない。僕は「悪夢」めがけて、剣を放り投げた。

でも、 できなかつた。

右手に吸い付いたように、剣は離れなかつた。勢い余つて、僕は剣をぶんと振り回した格好になつた。遠心力に引っ張られて、ぐらりと体勢が崩れる。とつさに剣を杖のようにして、踏みどどまる。あやうく尻もちをつくところだつた。

かろうじて、体を支える。予想しなかつた動きに驚かされて、急に心臓の音が耳元で聞こえるくらい早くなつた。僕は大きく息をはいた。

情けない格好で顔を上げた時、そこに「悪夢」はいなかつた。

「え 」

ぽかんとして、僕は周りを見回した。物置教室に、おかしなものは何一つなかつた。ただ僕と杉原さんが、呆然と立ち竦んでいるだけだ。

「……あいつ、どこに行つた？」

「……わからなーい」

杉原さんも驚きに目を瞠つて、「悪夢」がいたはずの宙を見つめた。そしてゆっくりと、僕に視線を移した。

「私には、新くんが『悪夢』を斬つたように見えた」

「え？」

僕らは顔を見合わせてから、そろつて僕の右手に重くぶら下がっている剣を、見下ろした。

目を疑つた。「悪夢」の色をした剣は、もうなくなつていた。

かわりに目の覚めるような銀色の剣を、僕は握りしめていた。

一 テンポ

「なんか、テンポ早くない？」

ヒロの声がして、僕はキーボードを弾く手を止めた。

男声パートの練習部屋は、1年生の普通教室だ。机を教室の前半分に寄せて、テノールとバスの男共合わせて9人でずらりと並ぶ。パートリーダーの僕だけ、前に立つてたまにキーボードで音を追いつつ、皆の歌を聞いていた。すっと姿勢よく立つ男子に囲まれるのは、正直あまり心穏やかな状況じやない。でも、的確な指摘もアドバイスもできないけど、こうやって練習をコントロールするのがパリーの役目なのだ。

思わず手を止めた僕にかられて、歌声もうやむやに消えた。ヒロはニヤツと笑つて、困惑気味の男声一同を見回した。

「さっきの16分音符のところ、みんないつも走るんだよ

「つーか、今のは新が早いんじやないか？」

和志が首を傾げて指摘する。僕はどきつとした。

僕のせい、と言われたのもあるけど、そもそも走っていることも気付かなかつたからだ。

「ちょっと待つて」

慌てて僕はメトロノームを引き寄せた。去年買つたばかりの、まだ傷もない黒いメトロノームだ。針を合わせて動かすと、つるりときれいな外見通りに、狂いなく指定のテンポを刻んだ。

明らかに、僕はこれより早いテンポでキーボードを弾いていた。練習中にぼんやりしてしまつていたけど、それはわかる。ヒロと和志をはじめ、皆が特にテノールの連中がどつと笑つた。

「しっかりしてくださいよ、パートリーダー」

「なんかさあ、新、最近ノッてないよね」

気まずくて、僕は頭をかいた。冗談まじりに、名ばかりパーティーの実力のなさを責められた気がした。ヒロが軽く笑つてひょいと肩をすくめる。

合唱部にあるまじき、足が長くてぐつと締まつた体つきのヒロは、そういう仕草が良く似合つた。実際こいつは運動部ばりにスポーツが得意だし、顔もいい。どうして合唱部に入ったのか不思議なくらいだ。合唱部女子の少なくとも半分は、気のないふりをして実はヒロのファンなのだと、僕は知つている。

「俺さあ、前から思つてたけど」

ヒロは持つっていた楽譜を丸めて、僕に向けた。

「新つて、なんかいいことあると、テンポ早くなるよね」

「えつ、それマジで？」

和志が勢いよく声を上げて、身を乗り出した。キンと耳を刺すつるささに、僕は顔を顰めた。

「嘘だろ。和志、楽譜を放り投げるな」
ぴしゃりとそう断じて切り上げようとしても、ヒロは「ヤーヤーヤ笑いをやめなかつた。

「いやいや、マジで。夏休み前だつて、赤川にすげー怒られてただろ。あの時そう思つたもん」

「夏休み前？」

和志がきょとんと聞き返す。

真面目な練習が、完全にくだけた雑談モードになつてしまつたようだ。割といつものことだけど、僕はこつそりとため息をついた。こういふところを、赤川さんに怒られるのに。

「そ、新が彼女と付き合いだしてすぐの時」

わざりとヒロが言つた。

途端に、顔が気まずそつな苦い顔になつた。和志でさえぴたりと黙る。彼女、という言葉が今の僕にとってどれだけのダメージになるのか、恐る恐る窺うような視線を向けてきた。

その反応で、合唱部内にどれだけ僕の恋愛事情が広まっているのかが、よくわかる。詳しいことは知らなくても、ふられたという結果だけは全員把握しているらしかった。好き勝手ウワサしないのはありがたいけど、気づかうような視線は、うつとおしいばかりだ。けれどヒロはそれでも、自信ありげだった。

「俺、見たんだよね。昨日新が例の彼女と、図書館棟の脇にいたと」「」

さつきより強く、じきっとした。まさか、見られていたなんて。

「マジかよ！」「

和志が裏返った声で叫んで、男声パート部屋はにわかに騒がしくなった。

僕が静止の声を上げるより早く、ヒロは皆に聞かせるかのように得意げに声を張り上げた。

「真面目な顔して話しこんでた。でも険悪そつた雰囲気じゃなかつたから、仲直りしたんだと思つたんだけど？」

「おい、練習中なんだから、無駄話やめろよ」「

焦つて割つて入つたけど、遅すぎた。めつたにないパーリーらしい発言だったのに、すっぱりときれいに無視された。

「やるじゃん新、ちょっと見直した

「結局どうなつてんの？元サヤなわけ？」

「ついてこの間、早退までした奴が」「

口ぐちに、あれこれと言つてくる。合唱部の男子が、個人的な恋愛話にこんなに食いつくとは思つていなかつた。

好みとかアイドルとかの話ならともかく、誰かの具体的な話なんて、普段あまりしないのに。彼女持ちの奴も少ないし、あまり生々しい話をするのは、みんな好きじゃないんだと勝手に思つていた。

……思い違いだつたみたいだ。

收拾のつかなくなつた騒ぎに途方に暮れて、僕は煽つた当人のヒロを睨んだ。

「 おい、テノール共。いい加減にしる」

むつりと地を這う低い声が、不機嫌に割つて入つた。

騒ぎの中心だつたお調子者のテノールを、それだけで黙らせるのだからすごい。僕とは比べ物にならない重々しい力をもつたその声は、森のものだ。今の騒ぎにも一切参加しない、筋金入りの堅物。いつそ潔いほどファッショニ性を無視した丸眼鏡を持ち上げて、森はひしゃりと言つた。

「無駄口を叩くな、練習中だ」

体は小柄なのに、森の声は太くて豊かなバスで、実力は合唱部一だ。上手いだけじゃなく練習態度も真剣で皆から一目置かれていて、だから発言に重みがある。

男声全体とテノールのリーダーは僕だけど、バスのリーダーは森が担つている。パーティーになつてもおかしくないどころか、明らかに適任と思われる森だけど、そくならなかつたのはちょっとつきつい性格をしているからだつた。妥協せず音楽を追求していく姿勢は尊敬するほど素晴らしいけれど、こだわりが強すぎて、ついていけないと感じる人と衝突してしまうことがある。だから一つ上の先輩から、パートリーダーの指名がきたのは僕だつた。

森の一聲で、和志も他の奴らも冷静になつたようだつた。咳払いをして、姿勢を正す。パート練習の最中だつたと、全員が気付いたらしい。

ヒロがまた小さく肩をすくめて、ニヤリと悪ガキのような笑みを向けてくる。ついでに森にも睨まれて、僕は慌てて練習を再開した。

テンポを意識しつつキーボードを弾きながら、僕は内心舌を巻く思いだつた。

新つて、なんかいいことあると、テンポ早くなるよね。

ヒロはノリが軽いけど、人をよく見ている。あとで根掘り葉掘り聞かれた時にどう答えよつか、僕は真剣に考え込んでしまった。

一一 一人の問題

昨日、図書館棟脇の花壇の前に座りこんで、杉原さんと話しあつた。

「『悪夢』のこと、異世界のこと。話すべきことはたくさんあつた。僕は自分に起こつたことを、できるだけ全て話した。どうやって『悪夢』に会つて、取り憑かれたのか。どれだけあいつに悩まされたかとか、眠れない夜を妹に助けてもらつたとか、あまり情けなくなるようなことは言えなかつたけど。

「……新くんには、道ができたんだね」

僕の話を全部聞いた後、杉原さんはじつと考え込むように、ゆりくりしゃべり始めた。

「道？」

そういえば、『悪夢』も同じ言い方をしていた。体操座りで抱えた膝頭を見つめながら、杉原さんは頷く。

「『あちら』ではそういう言い方をするの。『悪夢』が人から人へ渡り歩くことを

「……『悪夢』が杉原さんから僕に伝染つた、ってこと?」

図書館棟脇の花壇は、校庭からも渡り廊下からも見えないとこにある。何の花も植わっておらず、忘れ去られたように乾いた土が盛られているだけだ。誰もいないから気兼ねなく話ができるけど、『悪夢』のいない日常の中で異世界のことを話すのは、ひどく不思議な感じがした。

「うん。『悪夢』は心から心へ渡り歩くって言われているから。……心に掛っている人へ、道ができやすい」

「

反応に迷つて、言葉に詰まつた。僕が「心に掛る人」なのだと、喜んでいいところなのだろうか。杉原さんは淡々としていて、こいつ

ちを見さえしないから、わからなかつた。

「新くん、剣をもつていたでしょ。たぶんあれが、道ができたしるしだと思つ」

「……しるし、つて？」

杉原さんはちょっと笑つた。その口元だけの笑みで、僕の疑問がすこく初步的なことなのだとわかつた。

「『悪夢』に憑かれた人をどう見分けると思つ？彼らは必ず足跡を残す。それが、しるし」

杉原さんの話が、よくわからないうちにまで伸びてきた。ぐるぐる頭をめぐる混乱を、僕はなんとか飲み下した。不思議で、わけがわからないと感じても、そういうものだと無理やり納得するしかない。「あちら」へ渡つた杉原さんには、異世界の常識がわかつてゐる。僕にはそれがないのだから。

「だからあの剣は、『悪夢』と似たようなもの。……『あちら』での私みたいなものなんぢやないかな」

「つまり、実物ぢやない？」

説明をどうにか飲み込もうとしている僕に、杉原さんは静かに頷いた。でも、僕には全くピンとこなかつた。

あの時、手に吸いついて離れなかつた剣は、ずつしりと重くて冷たくて、確かに存在していた。すぐに、幻のように消えてしまつたけど、あの剣は本物だと思つ。きっと人に向かつて振るえば、ざつくりと皮膚を切り裂いて、血が出るのだろう。

剣の感触を思い出して、僕はじつと両手を見つめた。

「きっとあの剣は、新くんの心に關わるものね」

ふと氣づくと杉原さんも、僕の手を見つめていた。

「私は『あちら』で、自分の意思で姿を変えられた、って言つたよね？」新くんの場合は、そういう意思が剣に働くと思つんだけだ

今も、剣を出せる？と杉原さんはこともなげに聞いてきた。

当然のようにに言われても、できるはずがない。途方にくれて、僕は呆然と杉原さんを見つめ返した。

あの剣は氣付いたら手の中にあって、氣づいたら消えていたんだ。どこからきたのかも、どこに消えたかもわからない。そんなものを、ひょいと出すことなんて無理だ。

「……ごめん、できない」

僕は力なく首を振った。けれど杉原さんは真剣な表情のまま、「いや、たぶんできるよ」と言つた。

「しるしさ『悪夢』が消えても、なくならない。何か、きっかけみたいなもの思い出して」

「きつかけ、つて言われても……」

思わず目が泳いだ。頬をかく僕を、杉原さんがじっと見る。

「きつかけさえ掴めば、今でも出せるはずだよ。あれはきっと、新くんが『ノントロールできるものなんだ』」

杉原さんのまっすぐな瞳は、そつと信じて疑っていないようだつた。それに圧されるように、僕はぐっと固く目をつむつた。やけくなつて心の中で、剣を出でここと何度も唱えた。

本当は、あの剣が出てきたきつかけを、考えたくなかつたのだ。

杉原さんには言えなかつたけど、きつかけなら僕はちゃんと覚えていた。忘れられないくらい、強烈な感情だったから。

杉原さんに対する怒り、憎しみ。「悪夢」の色をした剣は、そのままいつの間にか口から生まれた。真っ黒な炎のよつなあの衝動を、僕はまだ覚えている。それ自体はもう遠いけれど、杉原さんを傷つけてやりたいと確かに思つたのだと、その記憶が煤のようになつて心の中に残つていた。

思い出すたびに、後ろめたさと自己嫌悪で胸が悪くなるような思いがする。好きなのに、どうしてあんなことを思つたんだろ？

今はもう、傷つけたいだなんて思っていない。
むしろ逆なんだ。

一

杉原さんの驚いた声かして、僕は目を開けた。握りしめた手の中に、銀色の剣があった。

二二二

意図した途端 手に重みかかる 慌てて左手で支えて ほかん
とその重たい剣を見つめた。

この間と、同じ劍だった。色が変わつても、形はかわらない。平べつたくて幅の広い、鈍器のような劍だ。でもあの淀んだ色よりは、おぞましさがいくらか薄れていた。磨かれた刃が光を弾いて、僕は眩しくて目を細めた。

た。

二〇二

撫でる

この前は何の光も通さない
真っ黒な王たつたけど 今は違う
酸化した銀のようにくすんだ、
けれどそれよりも複雑に渦巻く色。

悪夢「の色た

のようだ。指先から伝わる冷たさに、背筋が寒くなつた。

「」の色はダメだ。見つめていると、ぐらりと視界が揺らぐ。魚の、ぱっくり割れた口。尾ひれに取り巻かれた息苦しさを、思い出して

卷之三

「すうじー！ やつぱり田舎た

杉原さんの弾んだ声に、ほーと我に返つた。

杉原さんは微笑んで、輝く剣先を見つめていた。嬉しそうに頬が赤らんでいる。そうっと優しく、指の腹で剣に触れた。

「……なんだか、懐かしい感じがする。やつぱりこれは、『あむら』

のものだね」

いとおしむよつた穏やかな杉原さんの横顔を、僕は呆然と見つめた。

杉原さんは剣を見ても、触れても、恐ろしさなんて全く感じていないうだつた。「悪夢」の色をした玉にも動搖しない。杉原さんにとってこの剣は、懐かしい 好ましいものなんだ。

得体の知れない、違和感のよつたものを感じた。僕と杉原さんの、認識の差。一目で血や痛みを連想させるよつた剣を、好ましく、懐かしく思つなんて。理解できぬいズレに、もやもやした冷たい不安を感じた。

「どうやつて出したの？何を考えて？」

こんなに笑顔な杉原さんを、久々に見る気がする。僕は今感じた違和感に気をとられていたから、大して考えずに答えた。

「何つて、杉原さんのことを。僕が考えることなんかそれ以外ないよ……」

杉原さんがぴたりと止まつた。笑顔も固まつて、頬がさらに赤くなつた。

え？とその反応にあつけていた。その瞬間に気づいた。一気に心臓が跳ねて、かあつと頬が熱くなる。

今、僕は何て言つた？顔から火が出るつて、『うつ』とを言つんだろう。恥ずかしい！

「まあ、とにかく！たぶんこの剣は、杉原さんがきつかけになつて出てきたと思う。コントロールできるかは、知らないけど

「そ、そう……」

杉原さんは赤くなりながらも、ちよつと困つた顔をしていた。その表情で、ふと僕は恥ずかしさが少し冷めた。

僕がこうこうことを言えば、杉原さんは困ってしまうんだ。改めてそう気づかされる。「悪夢」が去っても、僕がふられた事実はなくならない。……あきらめないと、決めたばかりだけ。

ちょっとしたことにこうして距離を感じては、予想以上にへこんでしまう自分を何とかしたい。杉原さんのこと、わかりたいと本当に思っているのに、少しつづまじただけでへこむなんて馬鹿みたいだ。もつとどつしり構えた男になりたい。

杉原さんを、困らせたいわけじゃないんだけど。

「『悪夢』がまた出るのか、どうなのかわからないけど」「僕は剣をぐつと握り締めて、杉原さんを見つめた。

「僕はもう、関わりがあるから。杉原さんだけの問題じゃ、ないよ」杉原さんははつとしたように、僅かに目を見開いた。何か言いたそうに唇の端を震わせたけれど、ついには目を閉じて頷いた。

「関係ない」という言葉がどれだけ容赦ない力で人を叩くのか、僕も杉原さんも、ついこの間思い知ったのだ。だからこそ杉原さんに宣言したかった。僕にはもう、「関係がある」ことなのだと。僕は剣を額の上に掲げて、刃を空へ向けた。空には秋の、刷毛で薄くはいたような雲が溶けている。その淡い空色が、銀に映った。誓いなんてどうやるか、全然知らないけど。

「僕も、力になりたいんだ」

それができるのは、僕だけなのだ。

午後最初に受ける数学の授業は、途方もなく眠い。満腹状態で、窓から気持ちの良い日差しがさしこみ、おまけに教科書が何を言っているかわからないとなればなおさらだ。僕はあくびをこらえながら、先生が黒板にさらさらと書いていく数式をぼんやり見つめた。

「で、この関数 $f(x)$ の積分は……」

数学の藤木先生の声は、ぼそぼそとこもつていて聞き取りづらい。こちらを振り向きもせず、ただひたすら黒板と向かい合つてこるので、僕らに教えているというよりは独り言に近かつた。

襲う眠気に負けて何人の頭が沈んでいるのが、僕の席からはよく見えた。前の席の吉岡も、早々に撃沈している。僕だって、やつとのところで踏みどまっているのだ。いつ睡眠学習者の仲間入りをしてしまっておかしくない。

眠気を飛ばすために、軽く頭を振った。すぐにふわふわと遠のきそうになる思考を、何とか手繰り寄せる。

呪文のようにわけがわからない数式は、もつて無視して、何か別のことを考えることにした。そうすれば、眠くなるはずだ。

別の考えることといえば、僕には一つしかなかつた。剣のことだ。

「悪夢」のいない今でも剣が出せるのだと知つて、僕はあれから家で、いろいろと検証してみた。そうして少しだけ、感覚が掴めたような気がする。

頭の中に、スイッチがあるようなイメージだ。辛抱強くそれを押して、剣を握った時の感触を思い浮かべる。あとは強く、念じるのみだ。

何度かやつてみたけど、目を開じてやるとやりやすくなつた気が

する。イメージに集中しやすいからだ。長い時間ひたすら何かを念じるのは、結構疲れことなのだと、僕はこの頃知った。目を閉じれば、集中する分その時間が短くてすむ。

スイッチになつてゐるのは、もちろん、杉原さんのことだ。

思い出とか、感触とか、具体的な何かを思い出すわけじゃないけど、彼女のことを考える。その瞬間は、甘さも苦さもないまぜになつたような、不思議な気分になつた。

僕は杉原さんのことがもちろん好きだけど、彼女によつて喚起される感情は、もう純粹に「好き」というだけじゃないのだろう。そう、気づかされた。もっと色づいていて、生々しくて、ちらりと裏返して見れば、黒くて嫌なものも確かにある。そんな「好き」なんだ。

だからスイッチを押す時は、慎重になる。痛む歯を舌先で探るみたいに、そつと、時間をかける。自分の生々しい感情と向き合つのは、僕にとっては結構、怖いことだった。

「……」

初め、僕はその声に気づかなかつた。

聞き取りづらい藤木先生の声にまぎれて、ブツブツとラジオのノイズのような音がした。割と近くから聞こえたけれど、誰かの携帯のバイブか何かだろうと思つて、大して気にも留めなかつた。

でもその音は、なかなか止まなかつた。いや、ふつと途切れたり、また聞こえたりと、明らかに携帯の音とは様子が違つっていた。そしてどうやら、人の声のようだつた。

不審に思つて、僕は周りを見回した。僕の席の周りには、机に突つ伏して完全に寝ている奴と、うとうと舟を漕いでいる奴、からうじて授業にしがみついている奴ばかりだ。テレビをつけたり、ラジ

才を聞いていたりするような奴なんて、どこにもいない。

声の発生源を追つて、ふと僕は手元に目を落とした。

そして、

思わず叫びそうになつた。

「！」

のけぞつた拍子に、ガタンと椅子が大きな音をたてた。

教壇に立つ先生が、怪訝そうな顔で振り返る。うとうと夢の世界に片足を突っ込んでいた連中も、ぎょっとした顔で僕を見た。

「何だ嶋本、どうした」

藤木先生が、平坦な声で聞いた。

「いや……何でもないです」

早口で答えて、僕はさつと足を組んだ。背中を丸めて、腕でかばうようにしながら、右手を隠す。

なぜか、僕は剣を握つていた。

ぼーっと考えていたら、うつかり頭の中のスイッチを押してしまつたようだ。まさか授業中に、こんなものを出してしまつなんて。信じられない思いで、一気に冷や汗が出た。

この剣は、他の人にも見えてしまうものなんだろうか。ひょっとして、見つかつたら銃刀法だとか、危険物所持だとかの罪に問われてしまふんじゃないだろうか。

焦つてしまつて、上手い切り抜けかたがわからない。机に突つ伏すくらい身を低くして、僕は引きついた笑いを浮かべた。笑つて誤魔化せないだろうか。

「……腹でも痛いのか？」

藤木先生は不審そうに眉をひそめた。

「ええ、まあ……ちょっと」

僕は曖昧に濁した。腹を押さえているような格好だから、腹痛を起こしているように見えるのだろう。そういうことにして誤魔化してもいいのだけど、「じゃあ保健室に行け」と言われたら、一番困

る。こんなものを持っていたら、立ち上がりがない。

頭の中で毒づきながら、早く消えろと何度も念じた。藤木先生は、じいっと問うような視線で見つめてくる。足に挟んで隠している剣を見咎められるのが怖くて、僕はその視線を、息をつめて受け止めた。

けれど先生はすぐに、すっと興味を失ったように手をそらした。

「……授業中は、静かにするよ!」

ぼそっと、なめざりな注意をされる。恥ずかしくて頬が熱くなつたけど、僕はほっとした。どうやら、見つからずにすんだようだ。再び先生が黒板に向き直ったのを確かめて、僕はすっと手元を見下ろした。あの厄介な剣は、もうなかつた。

深いため息をついて、こつそり汗をぬぐう。ひとまずこの場は乗り切ることができた。でも、気がかりなことが残つていた。

かすかに聞こえた、あの声。あれは確かに、剣から聞こえていた。一体、何の声だったんだろう。

四 講とそして

授業を終わらせるチャイムが鳴ると、藤木先生は背中を丸め、誰よりも早く教室を出て行った。

息を吹き返したように、教室内が騒がしくなる。居眠りしていた連中も、チャイムと同時に目を覚まして、嘘のように元気になつていた。

次の授業は移動の必要がない世界史なので、教室内は休み時間の割に人が多くて、動きづらかった。でもそれをかきわけて、僕は杉原さんのところへ向かつた。休み時間は短いけれど、どうしても、さつき起きたことを相談したかった。

杉原さんの席の隣には北沢が座つて、2人で楽しそうに喋つていた。この2人は結構、仲が良いようだ。邪魔するのは気が引けたけど、僕は声をかけた。

「あの、杉原さん。ちょっとといいかな

驚いた顔が2つ、僕を見上げた。

「新くん? どうしたの?」

「うん、ごめん。ちょっと話したいことがあるんだけど……」

ここにじや言えない、という含みをもたせて、言葉を濁した。異世界のことなんだと、必死で田で訴える。……通じるかどうか、かなりあやしかつたけど。

でも何か勘付いてくれたのか、杉原さんは頷いて席を立つた。

「わかった、行こうか。このみ、ちょっとごめんね」

「う、うん」

北沢はぽかんとした顔で、僕と杉原さんを交互に見た。

「……あの、2人つてさ、聞いていいのかわからないけど

眼鏡を押し上げて、北沢は慎重な口ぶりで言った。

「結局、その……どうなつてるので?」

僕と杉原さんは一瞬視線を交わらせて、同時に曖昧な笑みを浮かべた。

この質問には、僕は答えられない。沈黙を守る僕に代わって、杉原さんは困ったように首を傾げながら言った。

「うーん……。でも、まあ、仲良しだよ」

なんだか、不思議な誤魔化しかただつた。

困惑気味な北沢の視線に背を向けて、僕たちは教室を出た。

僕と杉原さんの関係は、結局、どうなっているのか。

部活の連中に続いて、北沢からも聞かれてしまった。でもそんなこと、僕自身が一番知りたい。

もう付き合つていなることは確かだ。でも僕と杉原さんの繋がりは、以前よりも深くなつたように思う。秘密を共有して、付き合つていた時よりももっと、特別な関係になつた。ちょうど今、視線で通じあつたよ。

だから僕は、まだ望みがあると思つことができるのだ。

人の来ない場所を求めて、屋上へ続く階段を上る。もちろん屋上に出る扉には鍵がかかっていて入れないけど、その扉の前のスペースがちょうど、2人並んで座るのにいい具合なのだ。密談にはもつてこいだった。

休み時間は少ない。階段に腰をおろして、僕はすぐに切り出した。

「さつき気づいたんだけど、あの剣から、声が聞こえるんだ」

「声？」

杉原さんはびくっと眉をひそめた。

「どんな声？何を言つていたの？」

心配げな早口で、杉原さんは尋ねる。僕は目を閉じて、首を振つた。

「わからない。すゞく小さな声だったから

剣を呼び出す手順を、頭の中で踏んでいく。急がないといけないけど、焦ると空回りして失敗しそうだ。だからなるべく落ち着いて、スイッチを押すイメージをした。

握った手に重みを感じて、僕は目を開けた。「学校」という言葉には全然似つかわしくない、銀の剣がそこにあった。

「すうい。もう完璧にコントロールできるんだね」

杉原さんが感心したように言つたけれど、僕は力なく首を振つた。

「まさか。全然だよ」

さっきの授業でも、剣を出すかと思った時に出したわけじゃない。うつかり出してしまっただけだ。

不用意にこれを思い浮かべていた僕が悪いのかもしないけど、場所もわきまえず出てこられて、本当に迷惑だつた。コントロールなんて、『冗談でもできる気がしない』。

柄にはめこまれた「悪夢」色の玉に、慎重に触る。

「まさかと思うんだけど、あの声はもしかしたら、『悪夢』のものなんじゃないかな……」

さつきからずっと、その可能性について考えていた。

魚の姿をしたあの『悪夢』は、消えたのではなくて、本当は隠れているだけじゃないのか？ 例えば、この剣の中に。そして、また出てこようとしているんじゃないのか。

だとしたらこんなもの、早く捨てなければならない。

そう思つて唇を噛んだ時、また、声が聞こえた。

「……」

ノイズ混じりの、小さな声だ。やっぱり不明瞭で何と言つているのか聞き取れないけど、人の声だと、はつきりわかった。

「この声だよ。どう思つてあの『悪夢』と、何か関係あるんじゃないかな」

僕は杉原さんの方を振り向いた。

そしてぎょっとした。

杉原さんは凍りついたような表情で、剣を凝視していた。

今にも倒れそうなほど、顔色が真っ青だ。指先が白くなるくらい強く、ぎゅっと拳を握っている。

こんなにも緊張して、鬼気迫る様子の杉原さんを、僕は見たことがなかった。

「どうしたの？ だい

大丈夫？ と僕は尋ねようとした。でもその言葉は、杉原さんにぶつかられた勢いで、喉の奥に消えた。

体当たりするよつた勢いで、杉原さんが剣に掴みかかったのだ。僕の手から剣を奪おうともするような強さだった。突然の衝撃に、危うく壁に頭をぶつけそうになる。とっさに左手をついて、体を支えた。

ひどく驚いて、僕は杉原さんを見つめた。

杉原さんは僕の右手ごと、剣を抱きかかえるよつにして持つていった。泣きだしそうに表情を歪めて、「悪夢」の色をした玉に、震える指先で触れる。

こんなに大切なものはないとよつた、想いのこもつた手つきだった。

「ヒトイ

そつと、杉原さんがささやいた。

どうしたんだ、と僕は尋ねようとしたけど、その機会はまた失われた。

玉から、濁つた色の靄が噴き出す。

その突風をまともに田に受けてしまつて、僕は慌てて顔を背けた。

いくらかその靄を吸いこんでしまつて、咳きこむ。

濁つた、暗い極彩色。忘れもしない、「悪夢」のまどつていた色

だ。吸いこんではいけないものなんぢゃないかと、すぐに不安になつた。

「何だこれ。大丈夫だつた、杉原さん」

咳きこみながら、僕はやつと目を開けて、杉原さんを見た。

杉原さんは、泣いていた。そして微笑んでいた。

靄はドライアイスのように足元に漂つていて、玉からもゆっくりとだけ、淀みなく湧き続けていた。でも剣を抱えている杉原さんには、全く何の影響もないようだつた。「悪夢」色の煙なんかには目もくれず、彼女は一心にある一点を見上げていた。

その視線を追つて、僕も杉原さんの正面にいるものを見た。

「……女？」

妙な格好をした女の人が、階段から数センチ浮いて、立つていた。

けれど、杉原さんと見つめ合つその人が女性ではないことに、僕はすぐに気づいた。

長めの明るい金髪を後ろでゆるく束ねていたから、女人に見えたのだ。おまけに顔だけで判断しようとしたら、きれいな女性にしか見えなかつた。でも首の太さと、体つきで、そいつが男であるとわかつた。

呆然とする僕の前で、杉原さんは再びわざやいた。

「……ヒトイ

泣いているのに、声も表情も喜びに満ちていた。杉原さんはするように、その男に向つて手を伸ばした。

それに答えるよつに、靄をまとつた彼も微笑んだ。そしてそつと、2人は手を重ねた。

「……ヨウ」

低い声はあまりに優しかつたので、僕には全てが、まさまさとわ

かつた。

誤魔化しようもなく、目をそらすこともできなかつた。

この世に2人しか存在しないように微笑み合う恋人たちを、僕はただ見ていた。

この場の邪魔者は、明らかに僕だ。

やつとわかつた。僕は杉原さんにとって特別じゃない。秘密を共有しているのだと、彼女の力になれるのは僕だけなのだと浮かれていたけど、僕は、部外者だ。

すうつと冷えていくような虚脱感に、吐き気さえした。

目の前の男は、「あちら」の 杉原さんの「好きな奴」に、間違ひなかつた。

?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7617m/>

夢の盾 現の剣

2011年2月1日00時40分発行